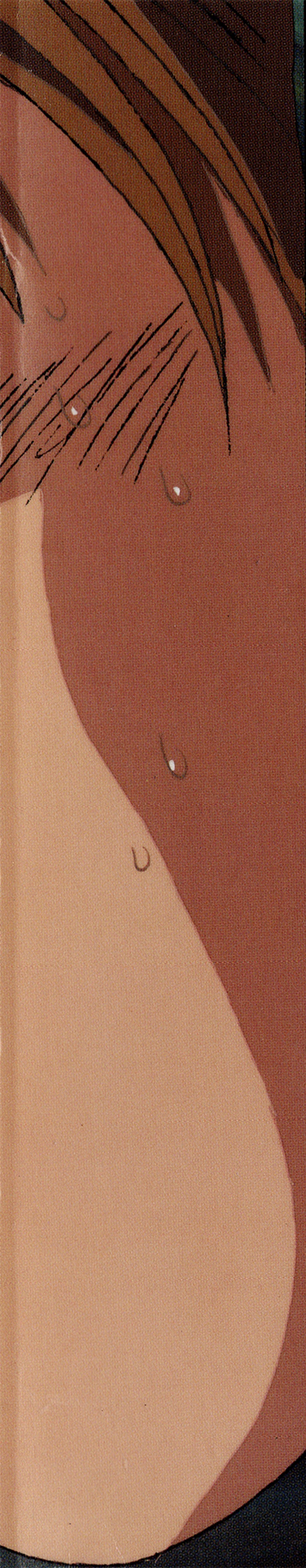
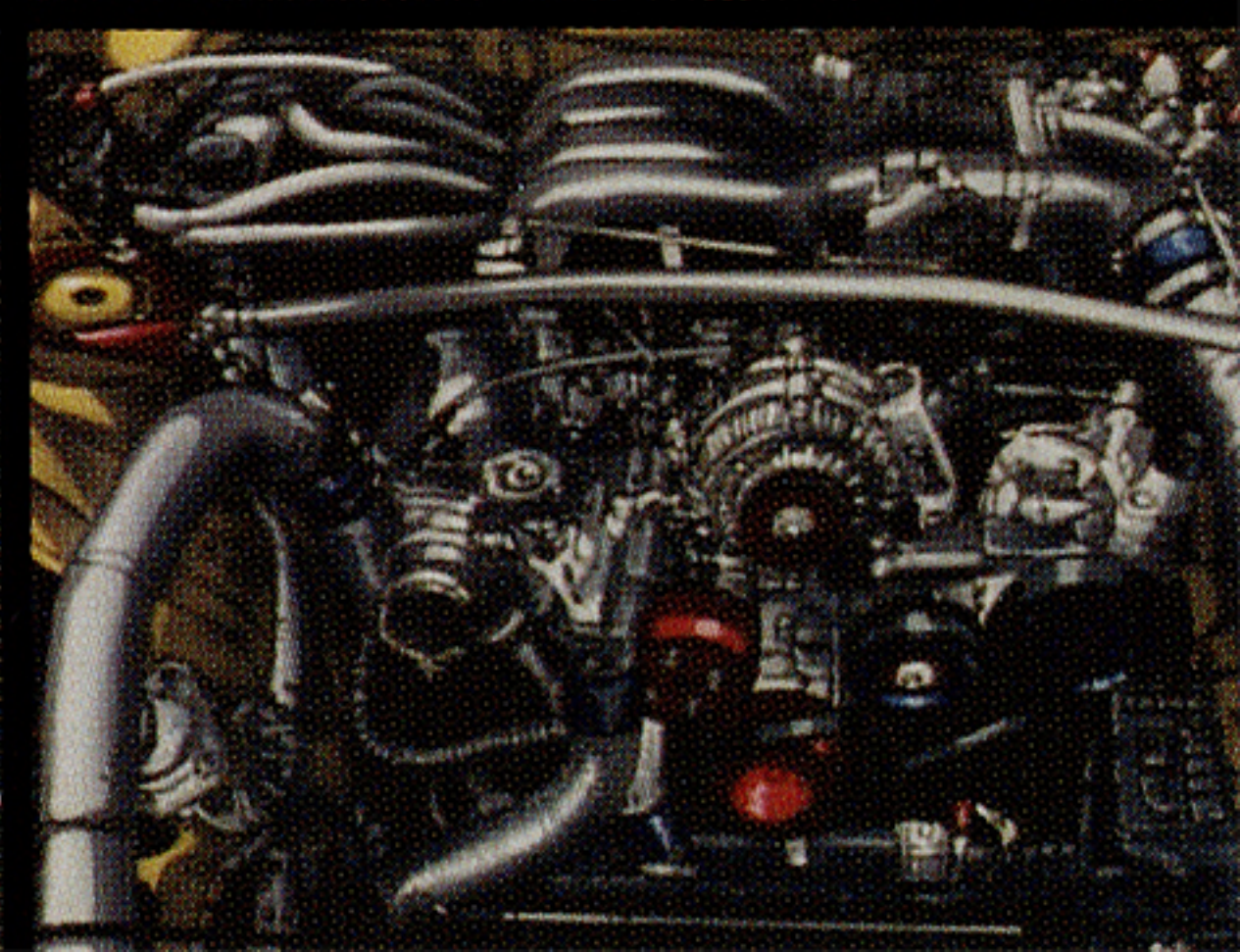
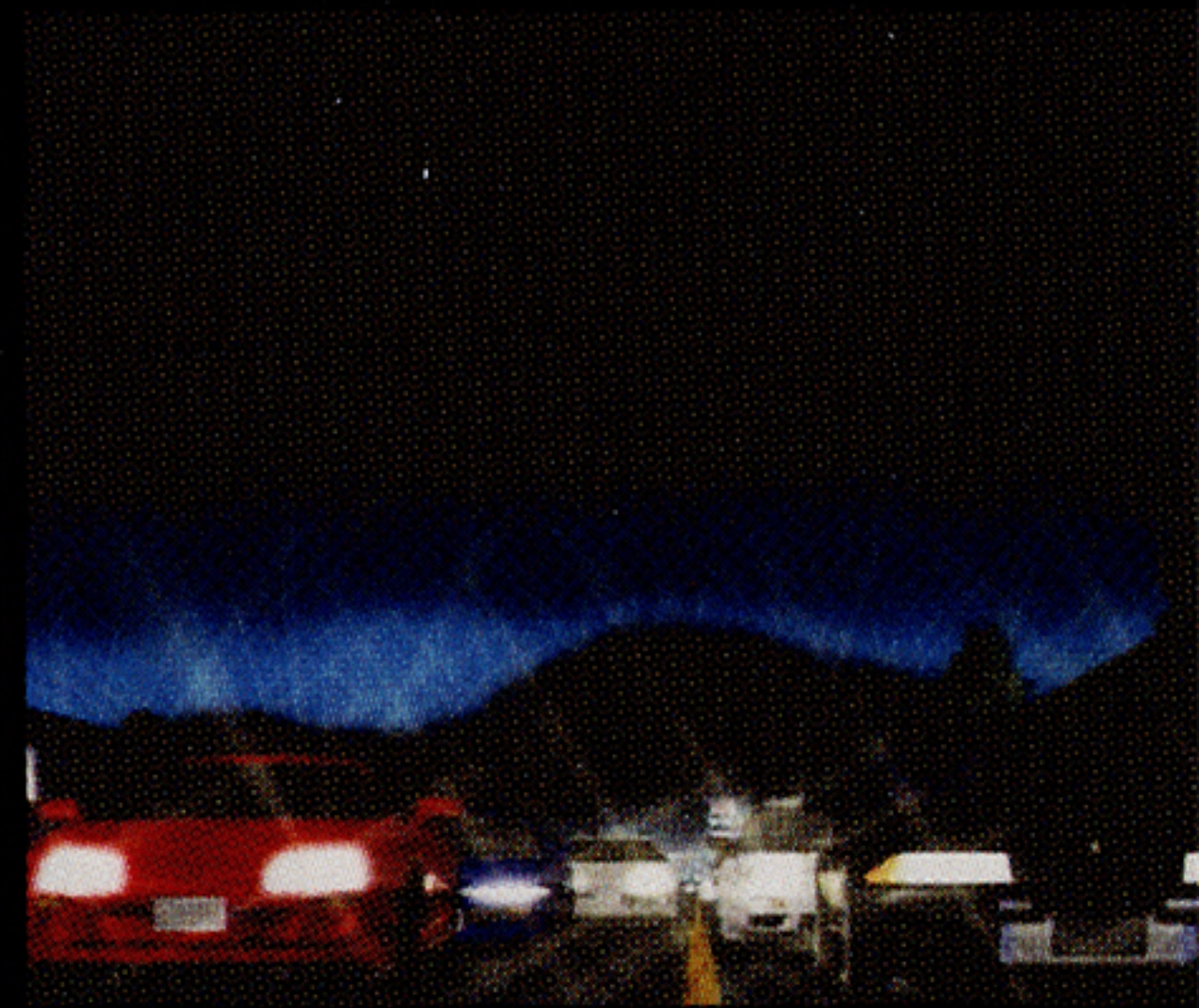
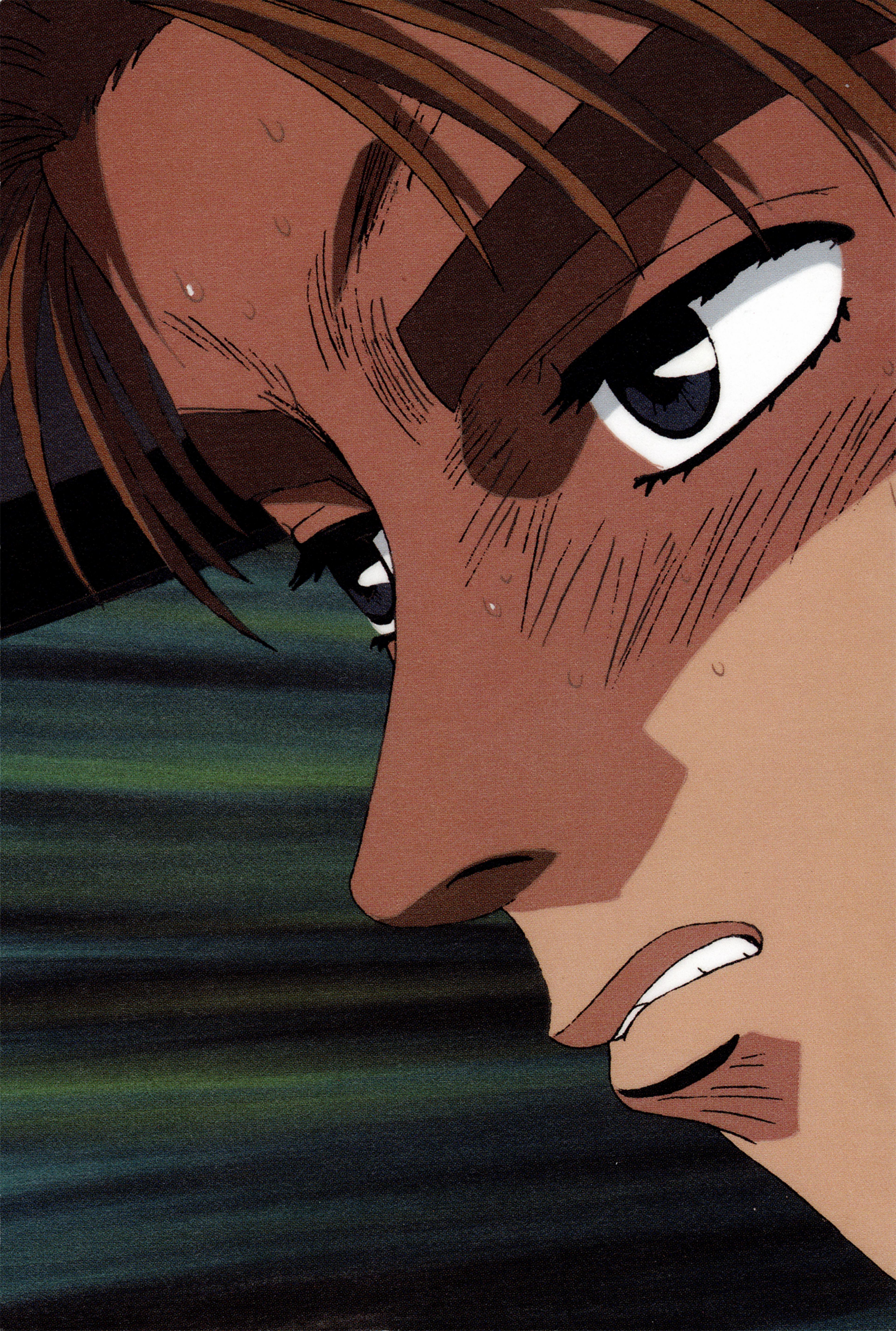
[イニシャル]
頭文字D
First Stage
メモリアルマガジン
Dash編
VOL.1
講談社

CONTENTS

頭文字D メモリアルマガジン Vol.1 講談社

m.o.v.e 14年目のHORIZON

『頭文字D』といえば、m.o.v.e! First Stageから最新のFifth Stageも、つねにm.o.v.eは『頭文字D』とあり続ける。ともに歩み、14年目を迎えた今だからこそ、見える地平を語る！

オープニングの映像を観たときにトリハダがたった

—— 今回は14年前に放送したアニメ『頭文字D』のファーストステージのお話を伺いたいと思います。

motsu もう14年も前ですか。懐かしいなあ。

—— 最初にアニメ『頭文字D』の主題歌提供の依頼が来たときのことを覚えていらっしゃいますか？

motsu 当時『ASAYAN』という人気のオーディション番組がありまして、yuriちゃんはオーディションに合格できなかったところを、t-kimura氏が見出して、僕らが結成されたんです。当時は『ASAYAN』も勢いがありましたからね。メジャーデビューをして、順当に歩みはじめて。ちょうど3枚目のシングルを出したころにアニメ『頭文字D』のお話をいただいたんです。ぶっちゃけていうと……そのシングルのセールスは、あまり良かったわけじゃなくて、みんなで「これからどうやっていこうか」と話をしているころでした。『頭文字D』サイドから「主題歌としてセカンドシングルの『around the world』でいきたい」と言われて。しかも「主題歌で使うところはラップのリリックの2番だ」と。そのリクエストを聞いて「ああ、これはスタッフの方々が僕らの曲を聴き込んでいてくれているんだな」と思えたんです。僕が一番覚えているのは、オープニング映像をスタジオに持ってきてくださったときのこと。映像をかけながら、音楽を爆音で流して、絵と音がシンクロしたときに、ぐわっとトリハダがたったんですよ。「これはッ！……」って。僕らはデジタルとポップスの融合を目指してきて、テクノロジーには積極的だったんですけど、アニメ『頭文字D』は3DCGでクルマが挙動する、すごく効果的な使い方をしていましたよね。新しいものが生まれている手ごたえがありました。

—— アニメのプロデューサーに聞くとPVのようなイメージでオープニング映像をつくっていたそうです。

m.o.v.e

1997年デビュー。1998年に放送がはじまった『頭文字D First Stage』のオープニングとエンディングに楽曲を提供。以降、『頭文字D』のすべてのオープニングを担当し、同シリーズの顔ともいえる存在になっている。
現在、「t-kimura」はプロデューサーのポジションになり、表舞台では、ラッパー「motsu」とボーカル「yuri」の２名で活動。motsuは高速で圧倒的なラップスキルと、抜群の作詞やライミングでアヴァンギャルドな世界観を創出し、yuriはダイナミックなボーカルスタイルで楽曲に生命を吹き込む。デビュー当時のコンセプトである「国籍や音楽的な枠組みといったジャンルに囚われず常に進化と変化を繰り返す」(プロデューサー t-kimura)は今も変わらず、日々、進化をし続け、ファンを驚かせている。

motsu そうらしいですね。オープニングもすごく印象的だったんですけど、エンディングも良くて。たしかファーストステージのエンディングは……。

yuri シングルの4枚目『Rage your dream』。

motsu そうそう。あのあとロサンゼルスに行ってアルバムを制作して、ファーストアルバムの『electrock』をリリースしたら、セールスが予想以上によかったんですよ。それでアニメの効果を知りましたね。アニソンになることで、アニメや原作のファンからも支持してもらえるんだ、って。

――『頭文字D』の原作コミックはお読みだったんですか？

motsu 『ヤングマガジン』で連載がはじまったのは1995年ですよね。連載がはじまったころから読んでいました。しげの秀一先生の作品は『バリバリ伝説』のころから大好きで、その後の青春漫画も良かったんですけど、『頭文字D』がはじまった瞬間に、「しげの先生はこれだよ！」と思わせるものがあって。だから個人的にはアニメ『頭文字D』の主題歌の話が来たときには強烈にテンションがあがっていたんです。

yuri 私は主題歌の話をいただいてから『頭文字D』を知ったんです。そこから一気に読ませていただきました。男同士の世界をはじめて知ったような気がして。こんな男の世界の主題歌を女性ボーカルが歌っても大丈夫なのかな、ってちょっと不安になりました。だけど、仕上がった映像を観たら、マッチしている感じがあって、不安はなくなりました。

『頭文字D』とともに走り続ける、m.o.v.eのネクスト

――アニメ『頭文字D』がオンエアされたあと、お2人のもとに何か反響はありましたか？

motsu TV放送がド深夜だと聞いて。「まあ、仕方がないか」と思っていたら、オンエアされた深夜にガンガンとメールと電話が掛かってきて。「motsu、お前よー！」と地元の友だちからの反応が大きかったです。

yuri 私も意外な友人から連絡をもらって。「ああ、この人、走り屋だったんだ！（笑）」「この人はクルマオタクだったんだ」と発見があったことを憶えています。

motsu クルマ好きって意外とわからないからね。隠れクルマオタクって意外といるんですよ。

yuri 『頭文字D』の仕事をしてから、隠れクルマオタクだったことが発覚した人がたくさんいましたね。

motsu あと、街でチューンしたクルマが近づいてきて、「うわー来たなあ」と思ったら、僕らの楽曲を大音響でかけていたりして（笑）。

yuri あったあった。何度もありましたよ。私も毎日運転しているんですけど、『頭文字D』の仕事をしてから都内を走っていると、ユーロビートをかけていたり、私たちの曲をかけているクルマとすれ違うことが多くなりました。

motsu ヒットしているんだな、と実感した瞬間でしたよね。

――14年間ともに走り続けているm.o.v.eとアニメ『頭文字D』。何か忘れられない思い出はありますか？

motsu あの物語は90年代でしょう。（藤原）拓海と（武内）イツキが第1話で「いくらするんだ、そのハチロクって」「えーっと、30万円ってのがある」って話すところがあったでしょ。高校生が「クルマを買いたい」という話題がすごく時代を感じさせるんですよ。しかも、そのクルマが劇中でバトルするときにユーロビートが流れる。普通の感覚だったら、ヘヴィメタルとか、ハードロックとか、そういうBGMが流れると思うんですよ。あの90年代特有の時代感覚がすごくおもしろかったですね。

yuri 私は……『頭文字D』の主題歌を歌っているから「さぞかしクルマに詳しいんだろう」とまわりから思われてしまったんですよ。クルマ好きのイメージが私についたのは、戸惑いましたね（笑）。

motsu クルマの知識は、『頭文字D』つながりでしかないので。そこまでは詳しくない。たしか、原作のしげの先生は『バリバリ伝説』でデビューしたときにハチロクを購入されたんですよね。僕はm.o.v.eでデビューしたあとに、プレジデントを買っちゃったんですよ。『頭文字D』の仕事をしたあとだったら、きっとFDを買ったんでしょうけど……。プレジデントは遅くて、峠なんて走れないですよ（笑）。全然走れない。ちょっとだけ後悔しました。

――あのころから14年、m.o.v.eさんは『頭文字D』とともに走り続けていますね。

motsu まさか、自分たちが今に至るまで『頭文字D』に関わるとは夢にも思ってもいなかったですね。

yuri 新シリーズ（『頭文字D Fifth Stage』）でも新曲を歌っています。新曲は『頭文字D』シリーズの中でも、また屈指の速い楽曲になりました。楽しみにしてください！

m.o.v.e最新情報！

2012年12月19日（水）

15周年記念ベストアルバム「Best moves.」発売決定!!!

スペシャル プライス盤
（CD２枚組）¥2,480（税込）

スペシャル デラックス盤
（CD３枚組＋DVD）¥4,480（税込）

2012年12月29日（土）

渋谷O-EASTにて、「Best moves.」の購入者抽選による**15thアニバーサリー無料ライブ**が決定!!! 応募フォームはm.o.v.eのオフィシャルホームページ（http://electropica.com/index.html）に開設予定！

around the world
1998年1月7日発売
¥1,020（税込）

over drive
1998年3月18日発売
¥1,020（税込）

Rage your dream
1998年5月13日発売
¥1,020（税込）

1998年生まれた

1月

ドラマ『聖者の行進』、モーニング娘。『モーニングコーヒー』でメジャーデビュー

1日 ドキュメントバラエティ番組『進め！電波少年』放送終了

4日 大河ドラマ『徳川慶喜』放送開始

長州力が東京ドームにて引退試合を行う。同時にアントニオ猪木が引退を表明

5日 ドラマ『おそるべしっっ!!! 音無可憐さん』放送開始

9日 奈良県天理市の黒塚古墳で32面の三角縁神獣鏡が発見される

ドラマ『聖者の行進』放送開始

映画『ラブ&ポップ』（原作：村上龍、監督：庵野秀明）公開

10日 ドラマ『三姉妹探偵団』放送開始

11日 ドキュメントバラエティ番組『進ぬ！電波少年』放送開始

12日 ドラマ『Days』放送開始

ヴィジュアル系ブーム

前年の1997年より、ヴィジュアル系バンドが盛り上がりを見せ、1998年にはヴィジュアル系ブームとして世間に広く認識されるようになる。SHAZNA、FANATIC◇CRISIS、MALICE MIZER、La'cryma Christi を中心に多くのバンドが次々とヒット曲を世に送り出していた。

14日 SMAPのシングル『夜空ノムコウ』発売

17日 クリントン米大統領、性的嫌がらせ裁判が行われる

20日 プロレスラー、ボボ・ブラジルが死去

21日 演出家・アニメーターの近藤喜文が死去

Kiroroのメジャーデビューシングル『長い間』発売

24日 映画『HANA-BI』（監督：北野武）公開

27日 作家・景山民夫が死去

28日 漫画家・石ノ森章太郎が死去

モーニング娘。のメジャーデビューシングル『モーニングコーヒー』発売

31日 映画『リング』（原作：鈴木光司、監督：中田秀夫）公開

映画『らせん』（原作：鈴木光司、監督：飯田譲治）公開

1月 January

1998年生まれた

2月

長野オリンピック開幕

2日 フィアットが「ブラビッシモ」発売
日産自動車が「キューブ」発売

4日 DOUBLEがデビューシングル『For me』を発売

6日 ワシントン・ナショナル空港がロナルド・レーガン・ワシントン・ナショナル空港に名称変更

7日 長野オリンピック開幕。日本の金メダリストは清水宏保（スピードスケート男子500m）、西谷岳文（ショートトラックスピードスケート男子500m）、里谷多英（女子モーグル）、岡部孝信・斎藤浩哉・原田雅彦・船木和喜（男子ラージヒル団体）、船木和喜（男子ラージヒル個人）

11日 Every Little Thingがシングル『Time goes by』発売

持田香織がファッションリーダーに

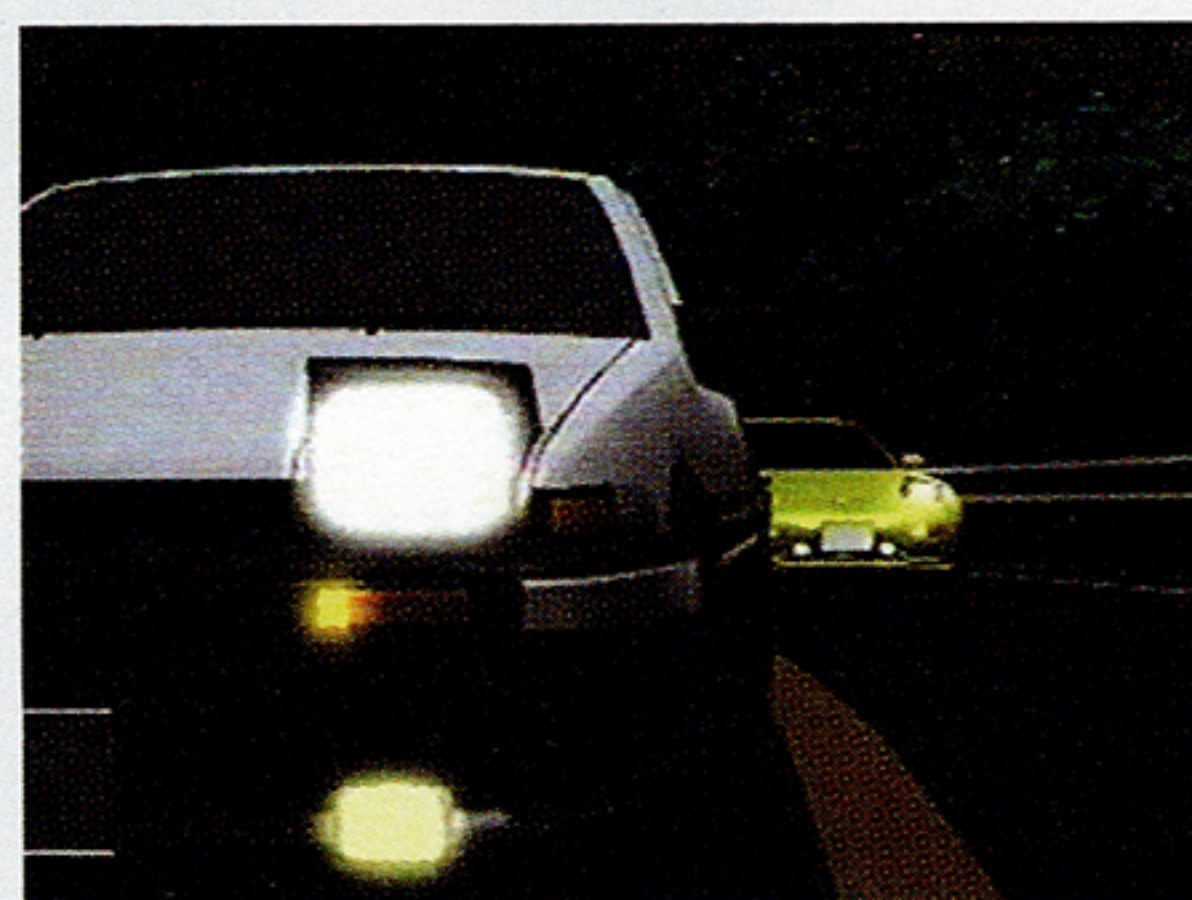
1996年にデビューしたEvery Little Thingは前年の1997年に発売した『Dear My Friend』が大ヒット。

続いて、発売した1stアルバム『everlasting』が約200万枚という超ヒットを記録する。また、10代、20代の女性ファンを中心に、ボーカル持田香織のライフスタイルやファッションセンスにも注目が集まる。1998年は、彼女がファッションリーダーと認知されるようになった年でもあるのだ。

アニメ［イニシャル］

頭文字Dが

First Stage

21日

任天堂がゲームボーイ用ソフト『ポケットカメラ』発売

MISIAがデビューシングル『つつみ込むように…』発売

23日

ダイハツ工業が「ストーリア」発売

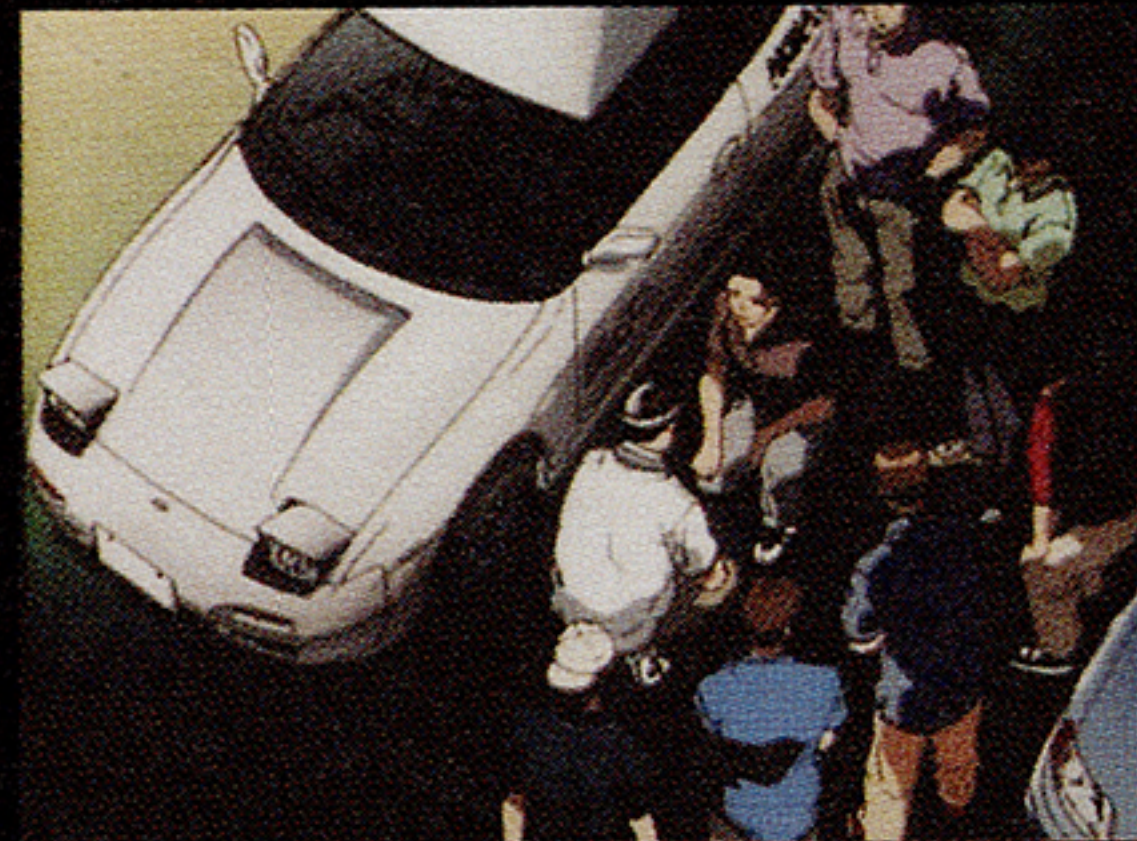
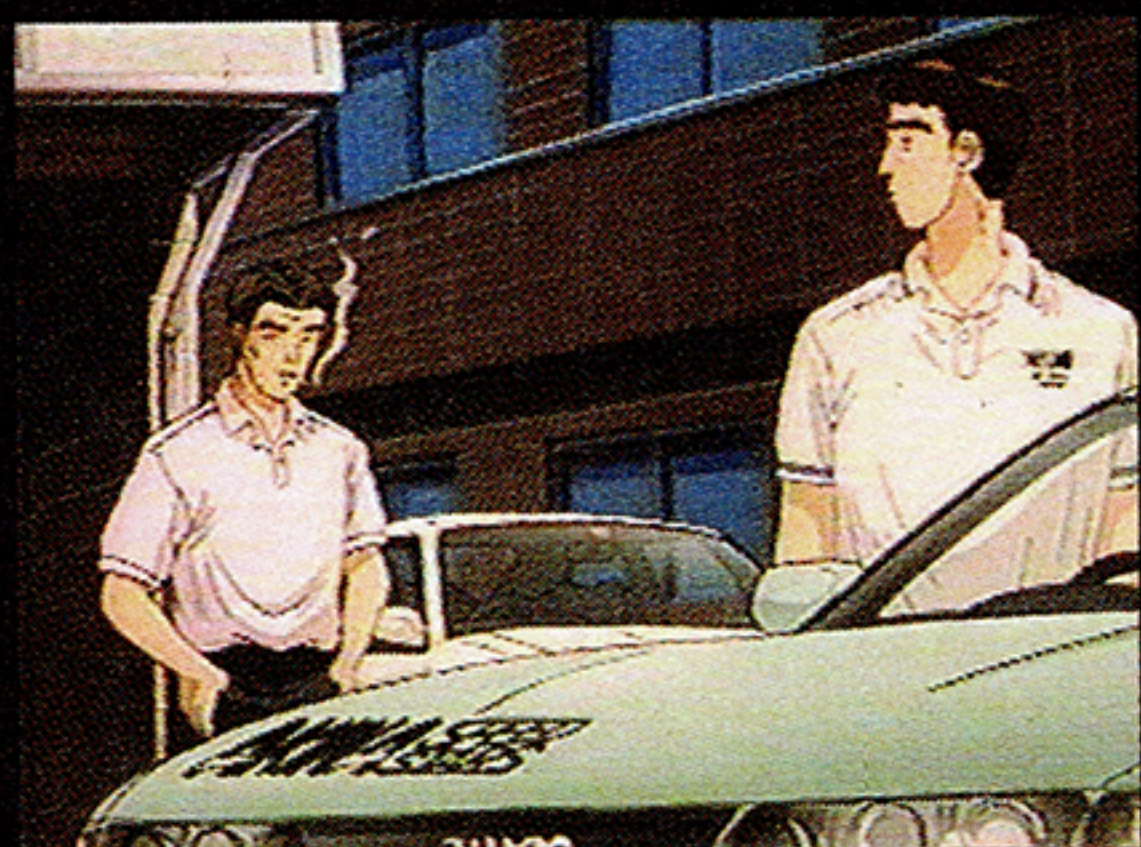
25日

金大中、韓国大統領に就任

28日

映画『PERFECT BLUE パーフェクト ブルー』（監督：今敏）公開

2月 February

頭文字[イニシャル]D
ストーリー解説

MAIN STAFF

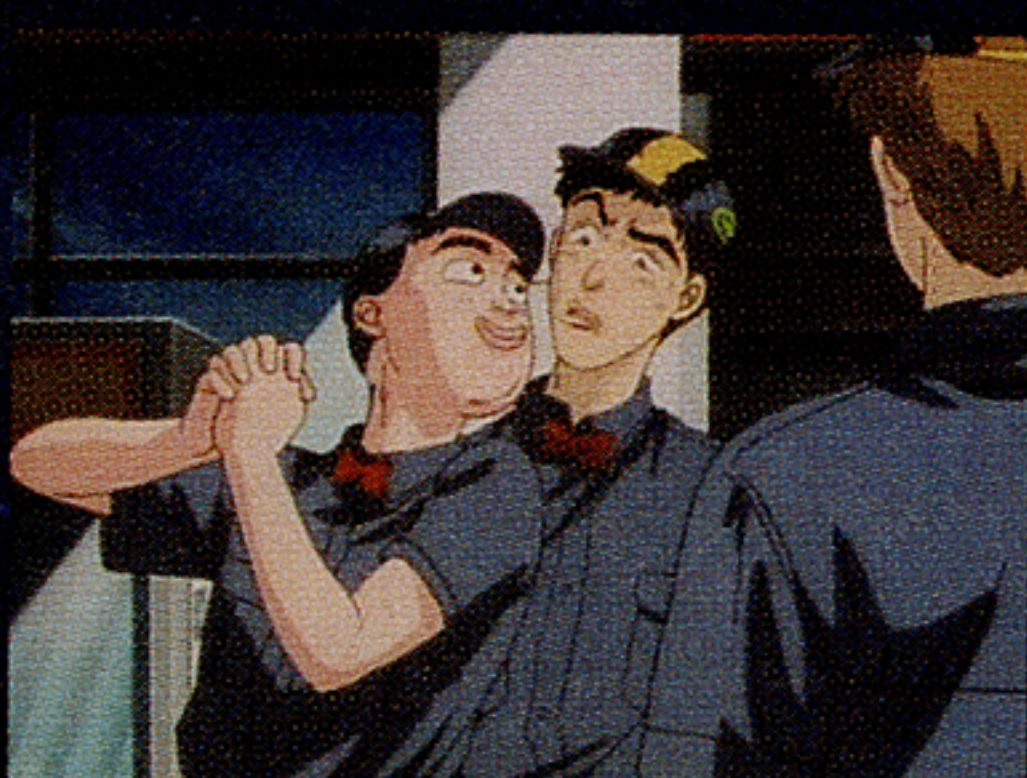
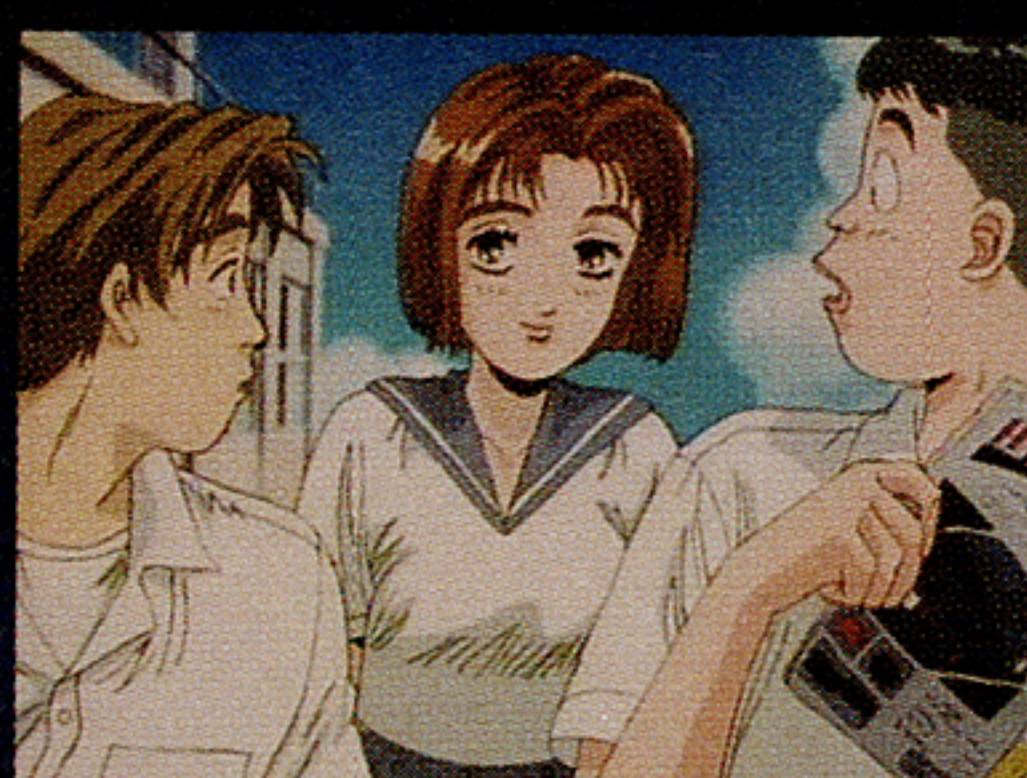
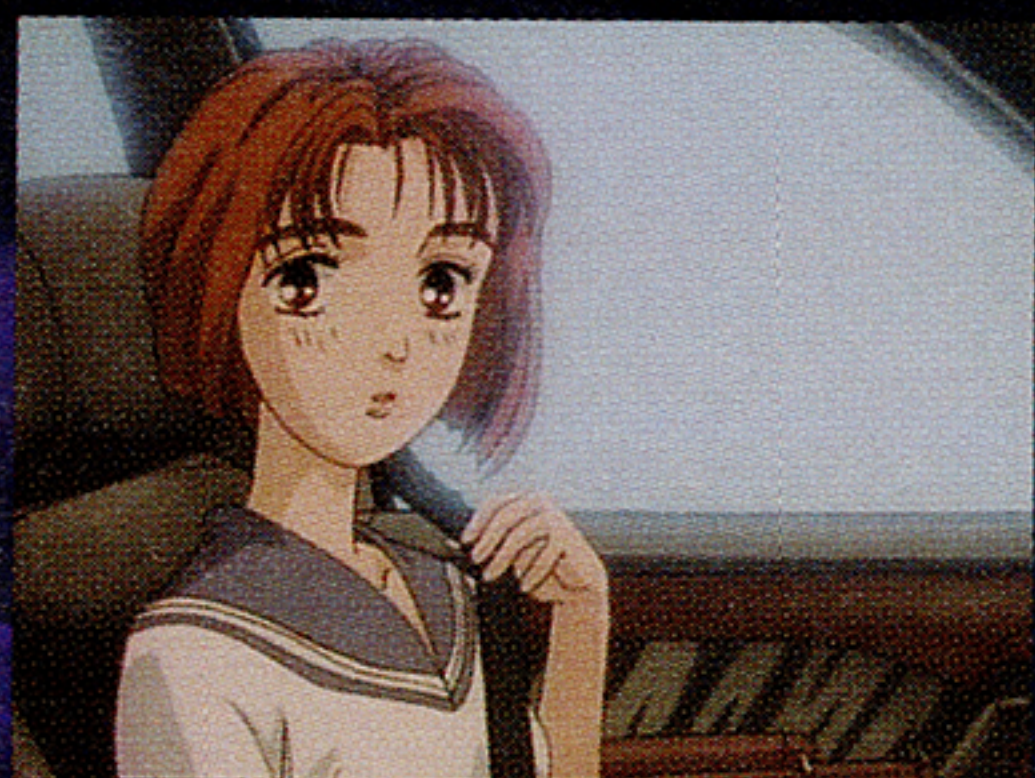
原　　作　しげの秀一（講談社　ヤングマガジン連載）
企　　画　庄司隆三（プライム・ディレクション）
エグゼクティブプロデューサー　宇佐美 廉（オービー企画）
キャラクター・デザイン／総作画監督　古瀬 登
CG監督　長尾聡浩（ネスト）
美術監督　高橋和博
音　　楽　勝又隆一
音響監督　三間雅文
制　　作　パステル
監　　修　土屋圭市　ホットバージョン編集部
主 題 歌　「around the world」m.o.v.e (avex tune)
オープニング　小深田真次
編　　成　金田耕司（フジテレビ）
監　　督　三沢 伸
製　　作　プライム・ディレクション／オービー企画

ACT.1 究極のとうふ屋ドリフト

STORY

先月免許を取ったばかりの高校生・藤原拓海は日々を退屈に過ごしていた。親友イツキがクルマを買おうと誘うが、お金もなく、つれない。2人はバイト先の池谷先輩に誘われて、秋名スピードスターズの集会に参加することに。そこに赤城レッドサンズの高橋涼介、啓介兄弟が登場。彼らは交流戦を申し出るが……。

CHECK POINT

関東最速プロジェクトを企てる赤城レッドサンズと地元の秋名スピードスターズが秋名山を走行する。両チームのクルマの挙動の違いが見どころのひとつ。クイックに動く、高橋啓介のFD3Sの動きともっさりと動く池谷先輩のS13。どちらのマシンが速いかがひと目でわかる。そして謎のハチロクの挙動はさらに強烈！

PUNCH LINE
名シーンピックアップ

ハチロクのドライバーは誰か。その正体が明かされない第1話。フェイントを入れて、コーナーへ車体を横に向かせたまま飛び込んでいく「慣性ドリフト」がカッコいい。「慣性ドリフト」はブレーキを使わず、自然とドリフト状態に持ち込む高等テクニックである。

WORDS

「な、なに!?
慣性ドリフト!!」(啓介)

NEXT EPISODE

予告編

「ドリドリファン並びにハチロクオーナーのみんな！お待たせしました。ついにはじまったぜ『頭文字D』！テンロクノンターボのハチロクで、350馬力ハイポテンシャルFDを追いまわす拓海のスーパードリフトテクニックはどうだったかなー？サイコーに決まってたよね。わかる人にはわかる、こだわりいっぱいの『頭文字D』!! 次回もアツい走りを観てくれよな。Don't miss it!!!」

BGM

音楽

SPACE BOY
DAVE RODGERS

物語の冒頭を飾る曲。イントロから徐々に加速する展開が印象的。冒頭のハチロクが秋名山を駆け抜けるシーンで使われる。この時点ではドライバーの正体は明かされない。

NO ONE SLEEP IN TOKYO
EDO BOYS

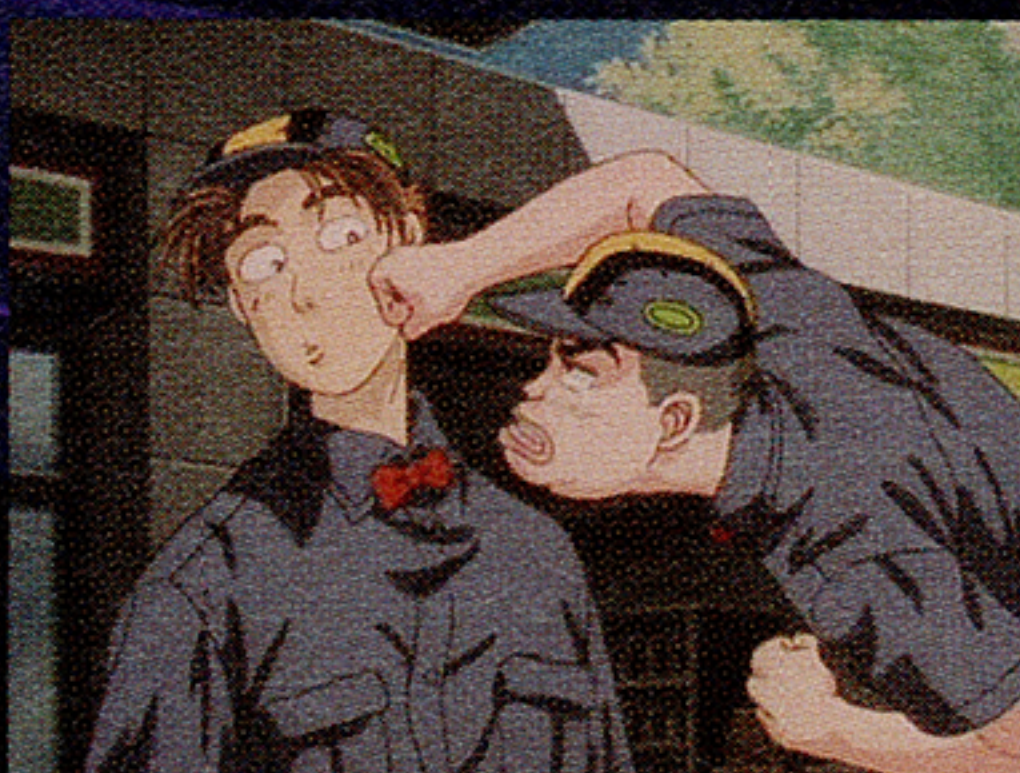
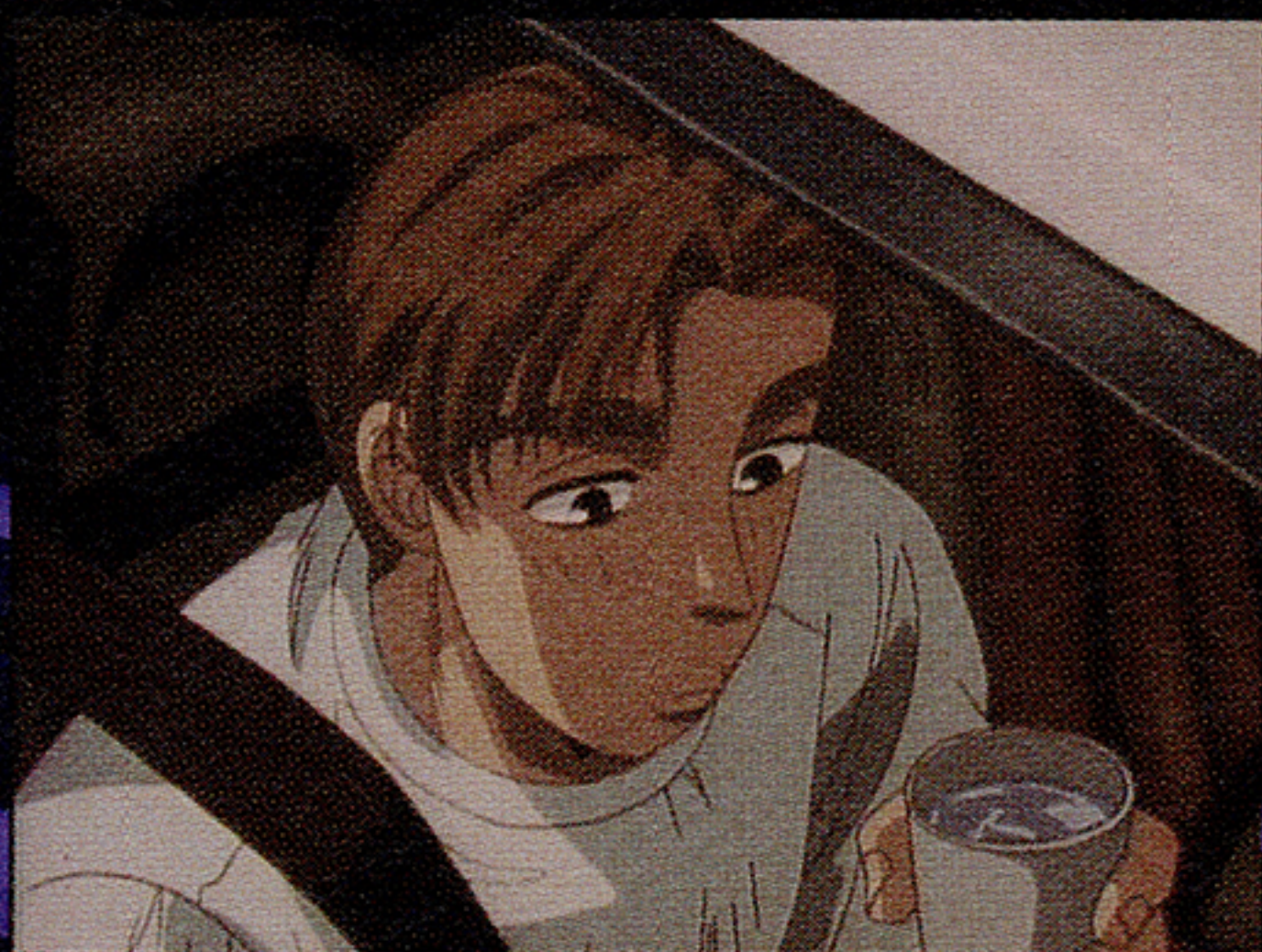
深夜に秋名山を走っていた高橋啓介のFD3Sが、謎のハチロクと競い合う。ACT.1のクライマックスに流れる曲。FD3Sとハチロクのドッグファイトがハイテンションに彩られる。

ACT.2
リベンジ宣言！ほえるターボ

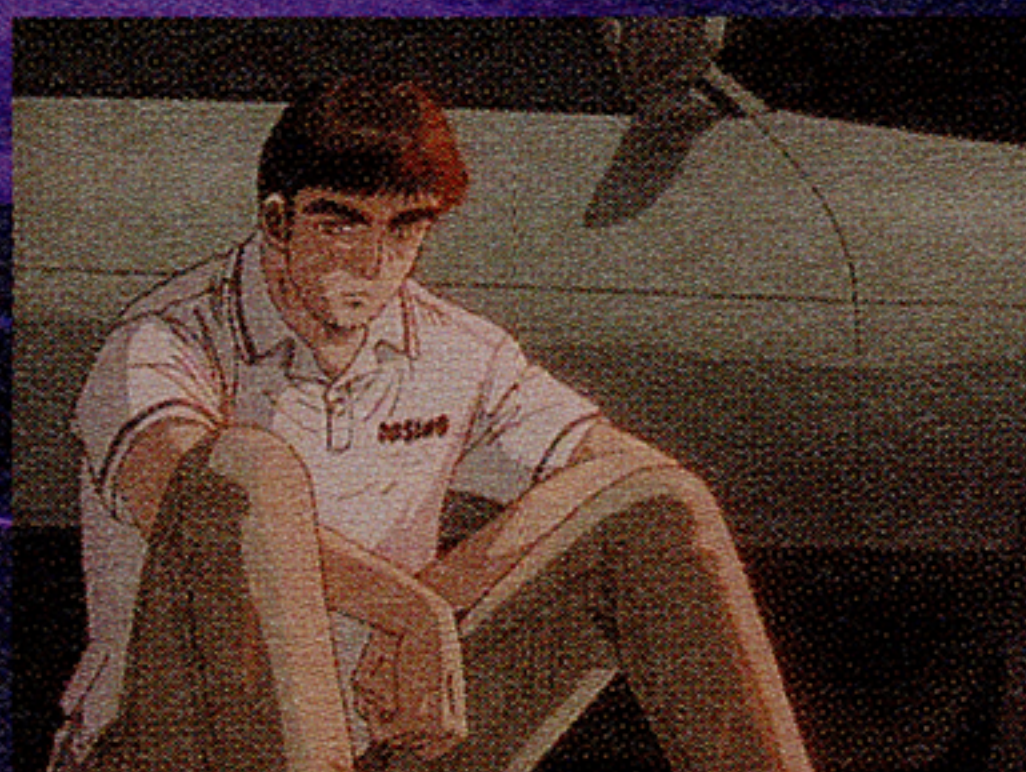
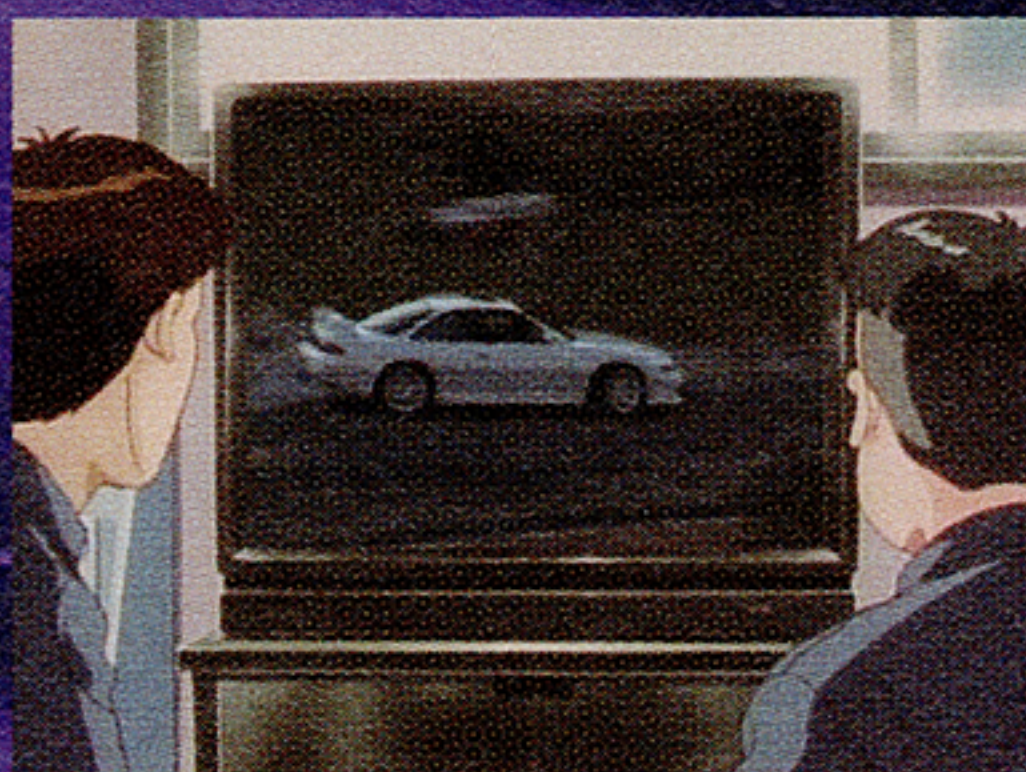
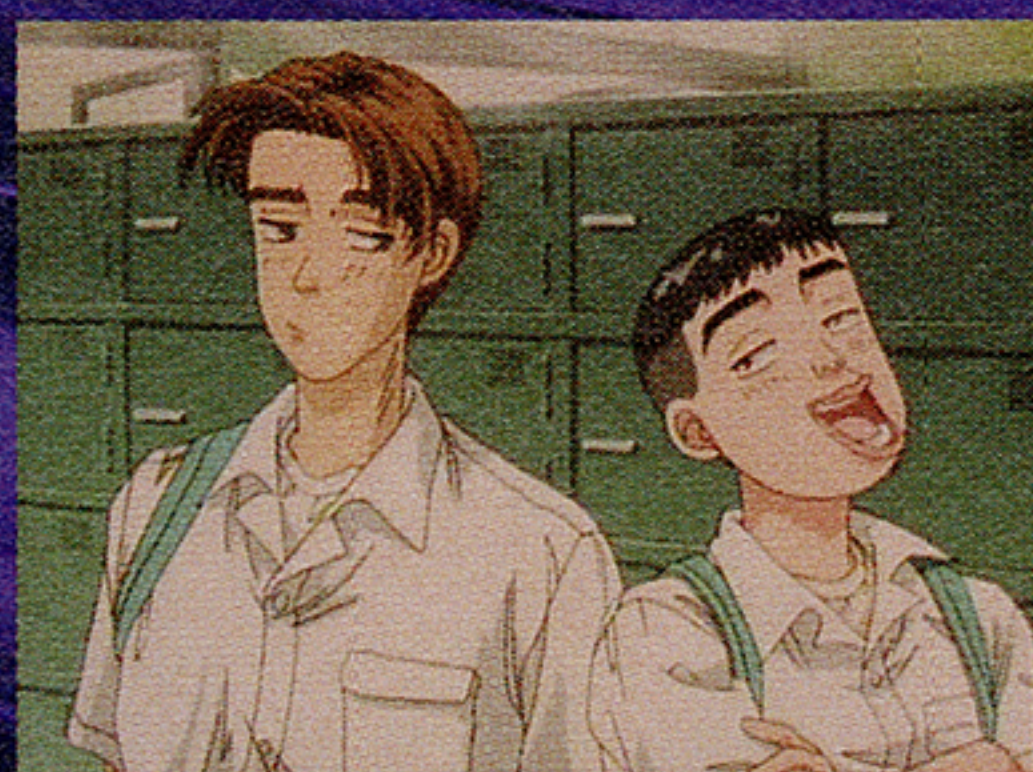
STORY

謎のハチロクにスーパードリフトを決められた啓介。彼のプライドはズタズタに壊されてしまった。あのハチロクの正体はいったい何者か……。翌日、池谷先輩は最速のハチロクがいるという話を頼りに、藤原とうふ店に向かう。そこで拓海と出会った池谷先輩は戸惑う。一方、啓介はリベンジを誓う。交流戦の日が迫る！

CHECK POINT

赤城レッドサンズとの交流戦を控え、池谷先輩とイツキがドリフトの映像を観て、ドライビングテクニック研究を行う。このとき流れる映像は実写。土屋圭市によるドライビング映像が流れる。ACT.1で拓海が見せた「慣性ドリフト」を、土屋圭市は見事に披露するが、残念ながら拓海はまったく映像に興味がないようだ。

PUNCH LINE
名シーンピックアップ

拓海がハチロクに乗ろうとすると、父の文太が水を入れた紙コップを手渡す。ドリンクホルダーに入れた紙コップから水がこぼれないように運転するという、文太流のトレーニングなのだ。慎重なブレーキングとアクセルワークが問われる。すさまじいトレーニングである。

WORDS

「だから、そのコーナーでさ、内側にクルマが流れないように、前のタイヤをこう流して……」(拓海)

NEXT EPISODE

予告編

「はい、今日のゲストは藤原とうふ店の頑固親父こと藤原文太さんです」「うむ」「文太さん、やっぱり持論は……ドラテクは教えられて身に付くものじゃねえ、自分で見つけるもんさ、ですか？　シブくてカッコ良かったです。ホレちゃいました」「いやあ、まあな」「じゃあ、次回の見どころをこっそり教えてもらえませんか」「そいつは観てのお楽しみだな」「は？　というわけで次回『頭文字D』お楽しみに！」

BGM

音楽

BE MY BABE

JILLY

ハチロクを探す啓介が深夜の秋名山を走るシーンに流れる。リベンジを願う感情が昂ぶる。

REMEMBER ME

LESLIE PARRISH

拓海が紙コップに水をはったまま秋名山を走るときに流れる曲。女性ボーカルが感情を揺らす。

SPARK IN THE DARK

MAN POWER

池谷先輩が深夜に秋名山で事故に遭うときに流れる曲。ギターが池谷先輩の叫びのよう。

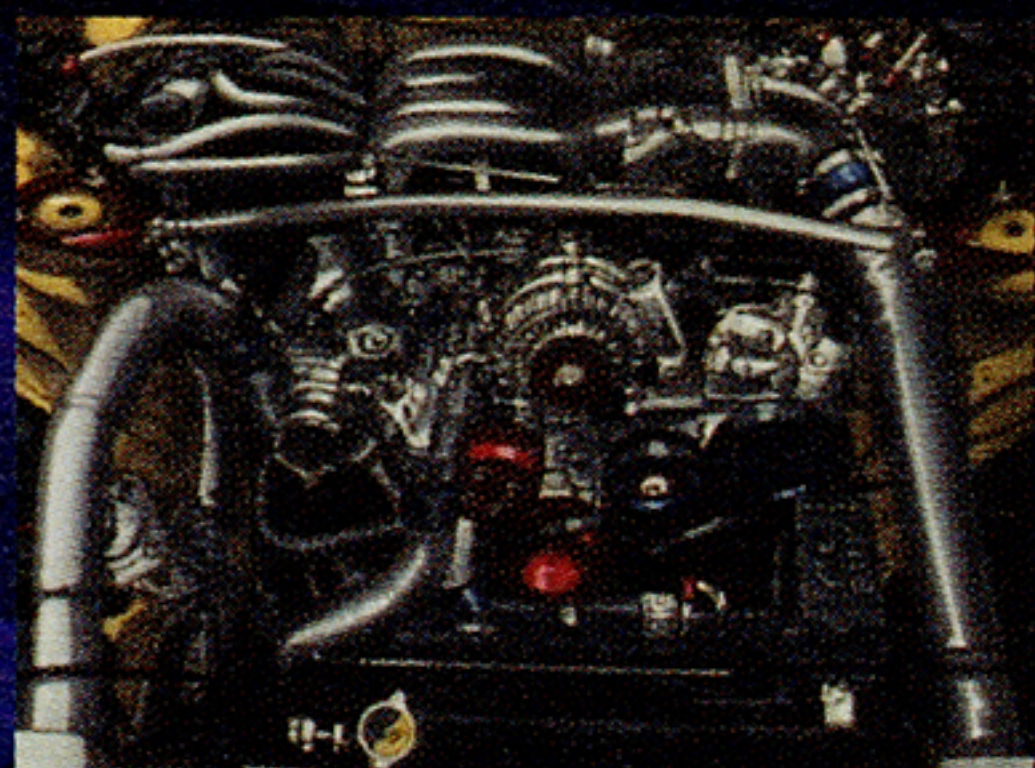
TITLE

ACT.3
ダウンヒルスペシャリスト登場

STORY

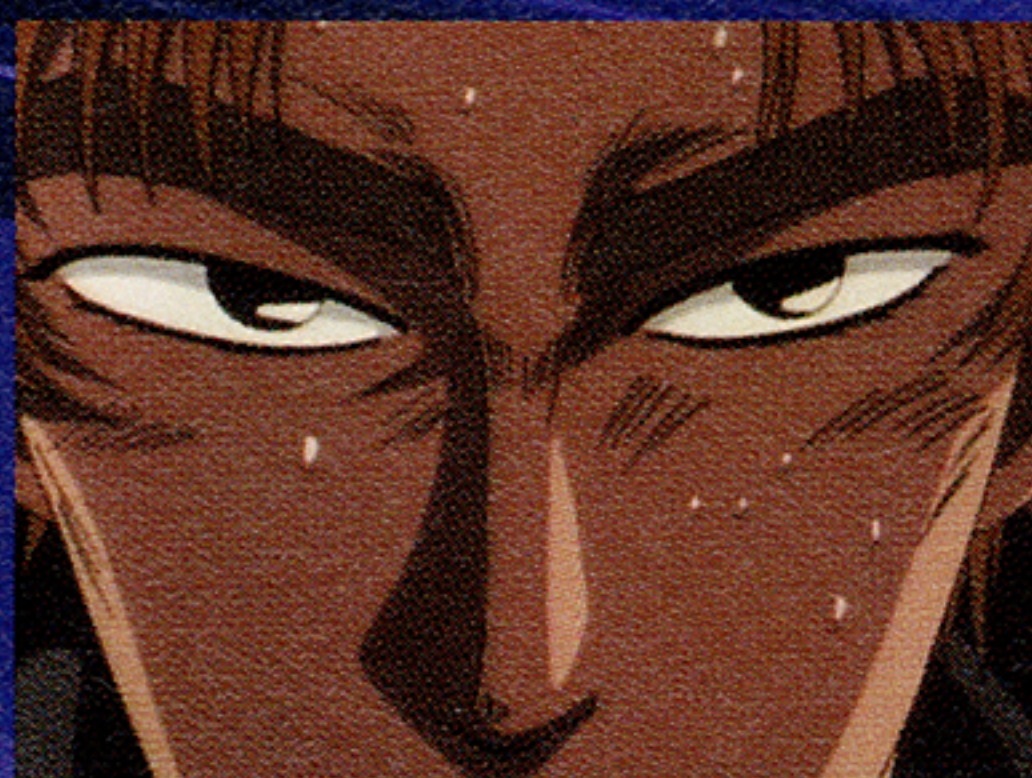
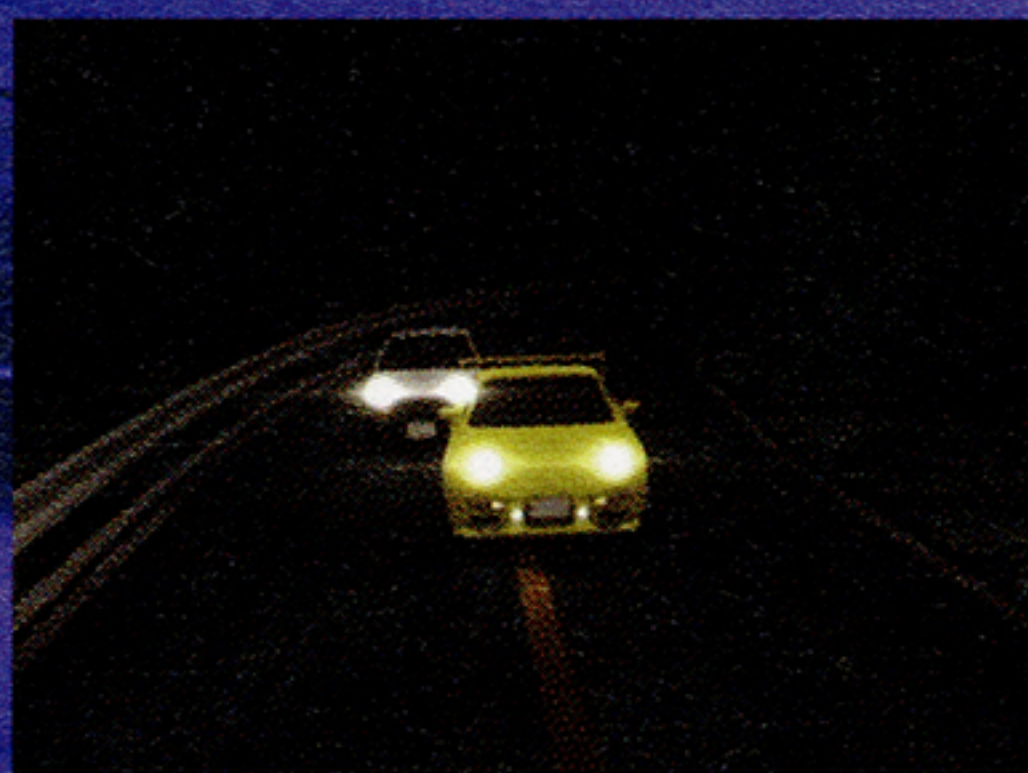
交流戦を前に、怪我をしてしまった池谷先輩。彼は自分の代わりに、藤原とうふ店の店主・文太に交流戦の出場を依頼する。文太は、日曜になつきとのドライブのためにクルマを借りたいという拓海に、クルマを貸す条件をつける。それは交流戦で赤城レッドサンズを倒すというものだった。いよいよ交流戦がはじまる。

CHECK POINT

赤城レッドサンズと秋名スピードスターズの交流戦は、周囲の走り屋たちの注目を集めていた。妙義ナイトキッズの中里毅もそのひとり。彼はR32を駆る実力者のひとり。ハイパワーなエンジンで相手を圧倒する力を持っている。彼はのちに拓海と対決することになるのだが……それはのちのエピソードになる。

PUNCH LINE
名シーンピックアップ

赤城レッドサンズが登場するとき、高らかなエンジン音が鳴り響く。その音の中にはロータリーエンジンの音も。『頭文字D』は実車のエンジン音を録音し、劇中の効果音に使用している。そのリアリティがクルマファンからも支持されたのである。エンジン音から車種を当ててみよう。

WORDS

「俺の敵はお前だけだ、でてこいハチロク！」(啓介)

NEXT EPISODE

予告編

「さあ、今回のゲストはアグレッシブな走りで魅了するレッドサンズの高橋啓介です」「よこせ！ さっさと出てきやがれ、秋名の幽霊‼ まさかおじけづいて逃げたんじゃないだろうな」「あのー、今度は勝てますか？」「うるせー！当たり前だろうが。何が何でもリベンジぶちかましてやるぜ！」「次回『頭文字D』ついに交流戦突入。どっちが勝つのか、ハチロク対FDのハイテンションバトル！ Don't miss it.」

BGM

音楽

DON'T STOP THE MUSIC
LOU GRANT

赤城レッドサンズが秋名山を走りはじめた。高橋涼介、啓介兄弟の走行シーンに、この曲が流れる。テンポの速いリズムとキーボードの痛快なフレーズがテンションを高めていく。音楽にあわせて、高橋涼介、啓介兄弟がパラレルドリフトで駆け抜けていく。そして、ついに拓海がハチロクを駆り、秋名山へ出発する！

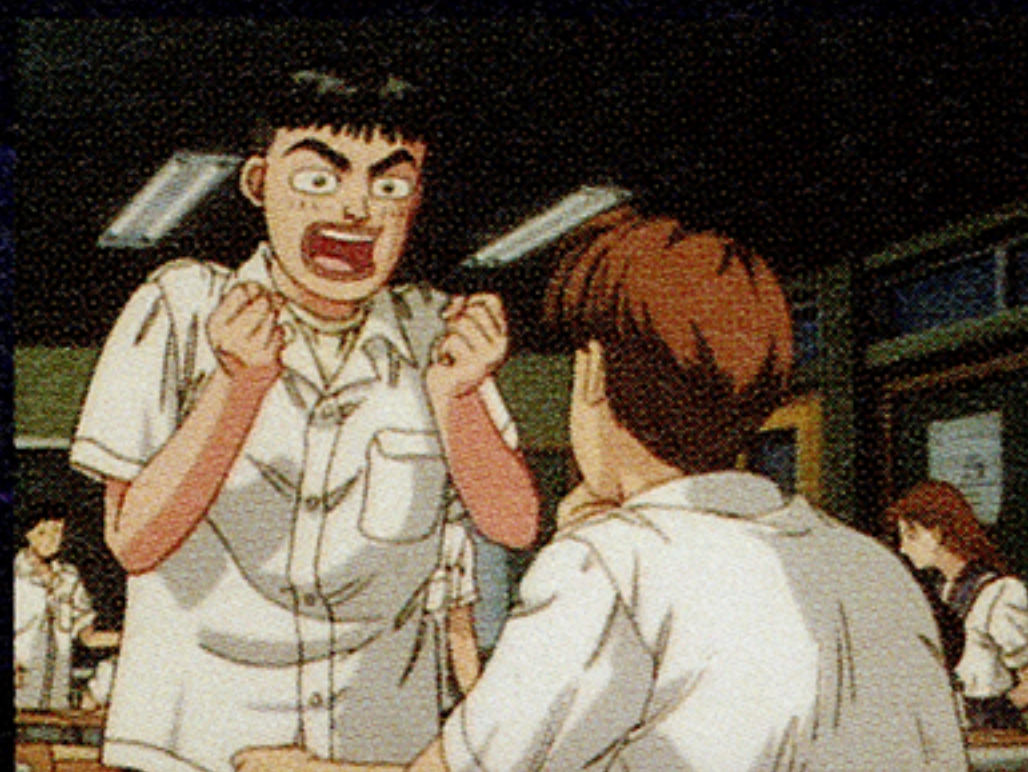
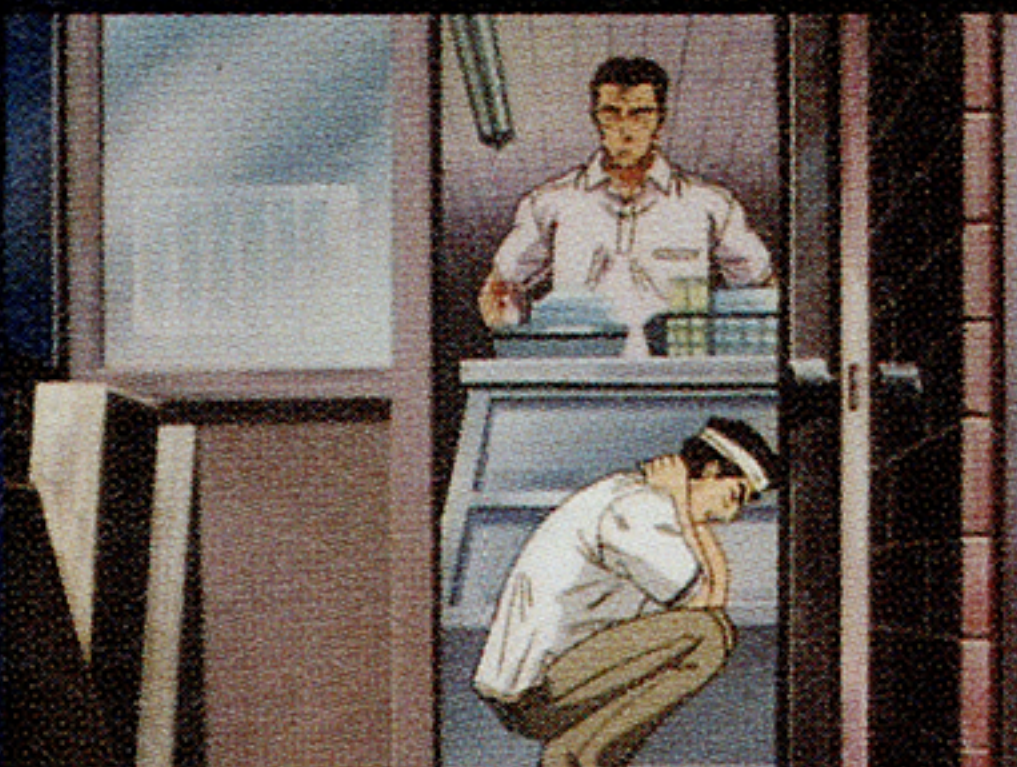
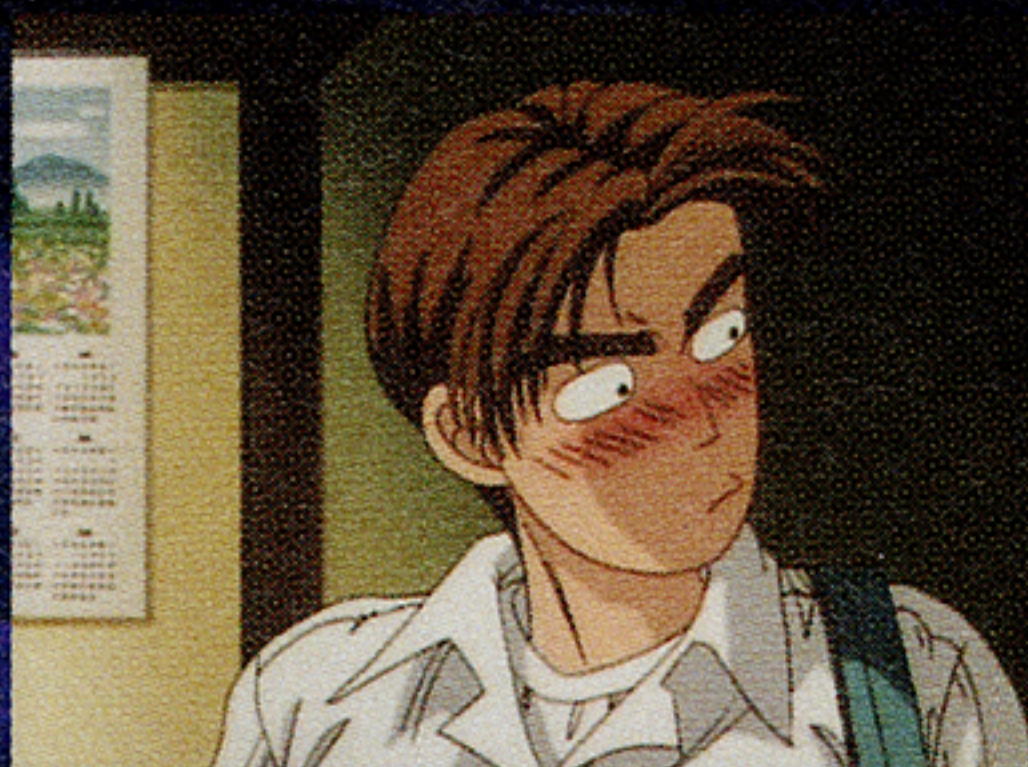
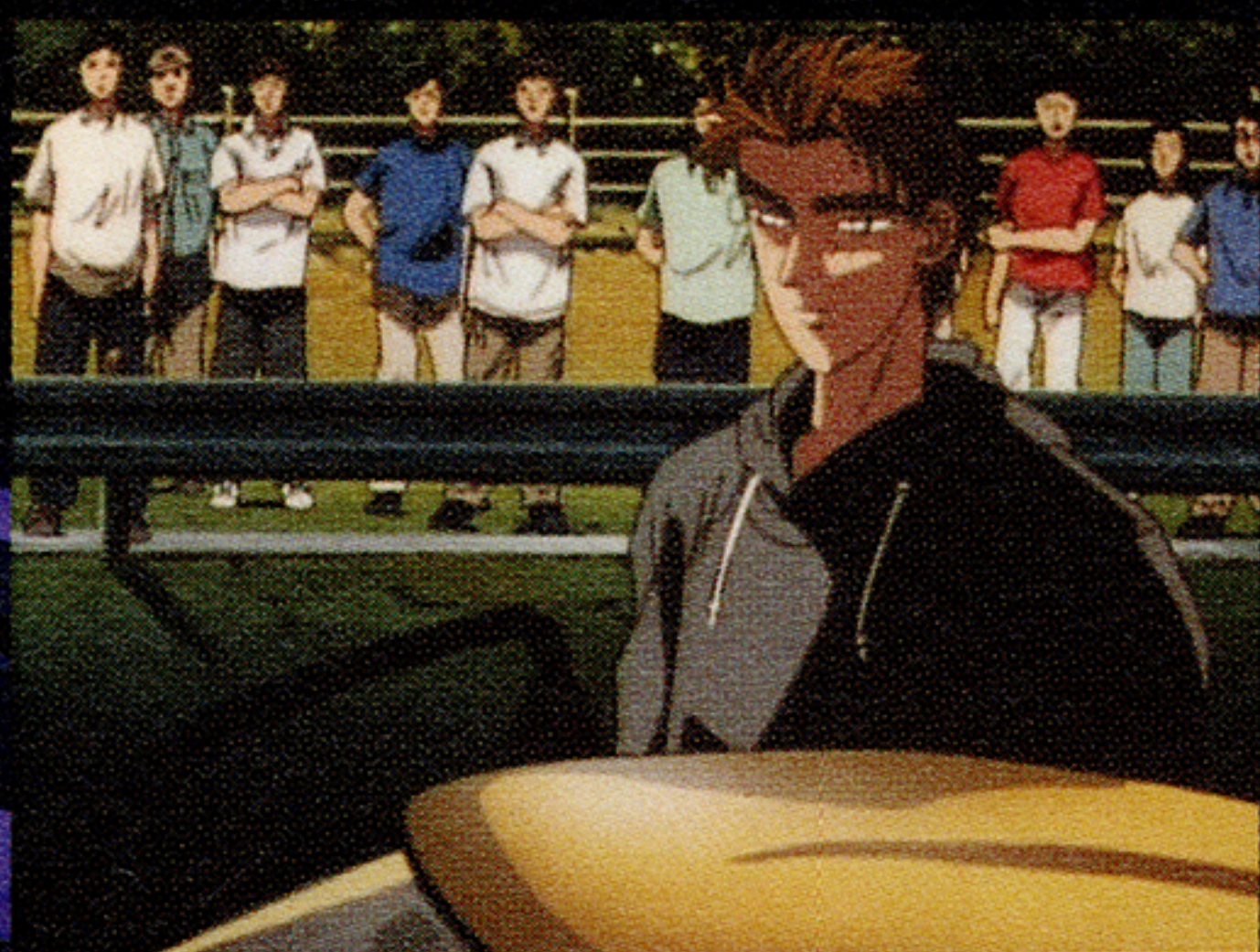
TITLE

ACT.4
交流戦突入！

STORY

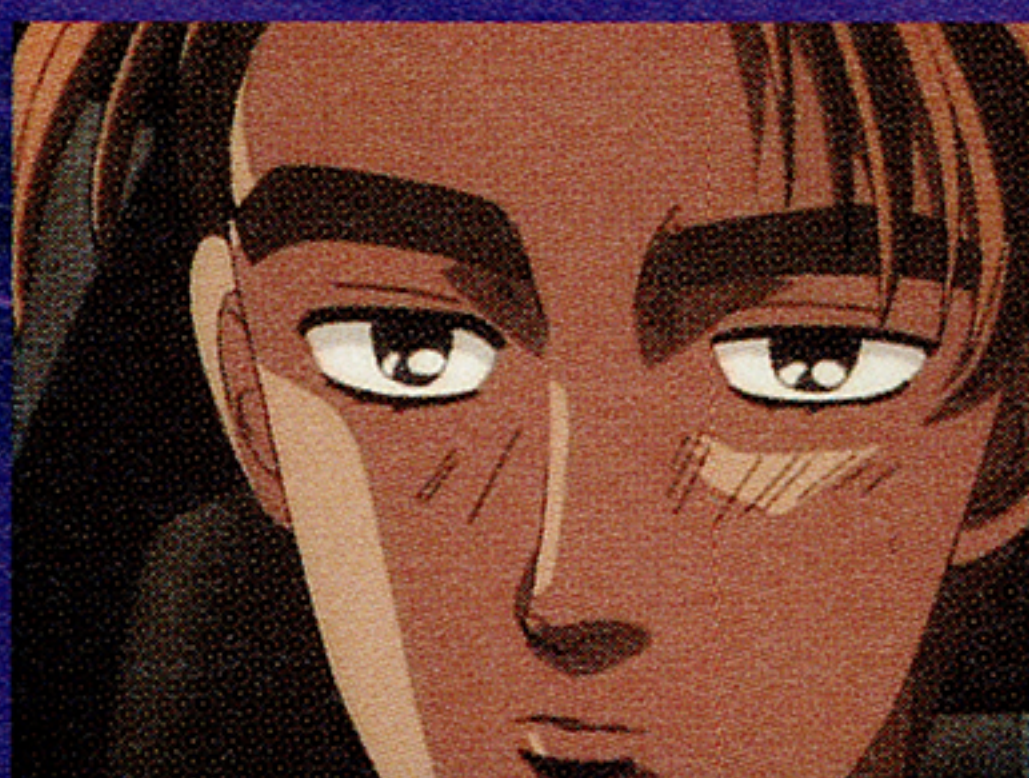
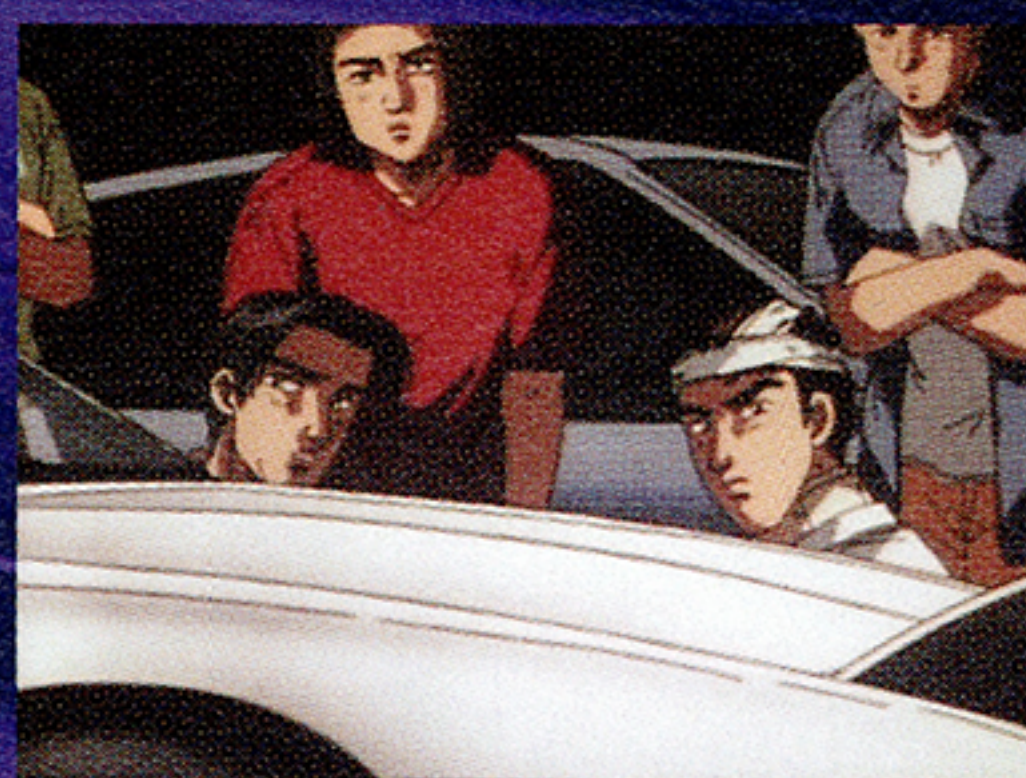
交流戦がはじまった。高橋啓介はハチロクが来るのを待っていた。しかし開始時間になってもハチロクは来なかった。スタートする直前に、パンダトレノが姿を見せた。啓介は待ちわびたハチロクの登場に興奮する。啓介はスタートで拓海を引き離すが、コーナーで一気に詰められてしまう。勝負どころは5連続ヘアピン！

CHECK POINT

走りにかけるプライドはひときわ高い啓介。拓海のハチロクに追いつかれたとき、啓介の驚きと焦る表情が生々しく描かれる。一方、拓海は表情を変えることはない。情熱と冷静、太陽と月、パワーとテクニック。啓介と拓海は正反対の性格の持ち主。拓海はこのレースをきっかけに、峠の走りに目覚めていく。

PUNCH LINE
名シーンピックアップ

ハチロクのエンジンは約150馬力。対する啓介のFD3Sは、兄の涼介がセッティングし、350馬力のエンジンを搭載している。その加速性能により、FDはスタートで圧倒的な差をつけてしまう。しかし、拓海のドライビングテクニックで少しずつ追いつくのである。

WORDS

「仕掛けるポイントは この先の5連続ヘアピンカーブだ!」

（拓海）

NEXT EPISODE

予告編

「ついに交流戦がはじまったぜ、拓海君！」「はあ」「今回のバトルのために何か練習はした？」「いえ、べつに。いつも豆腐を運ぶのと同じ要領ですから」「ああ、普段の仕事での走りがモノを言っているわけだ」「そんなところです」「ところで、FDを抜く秘策は何か持ってる？」「ええ、まあ。秘策っていうか」「ああ、ハチロク、ガソリン満タン付き、なつきちゃんとのデートがかかっていれば、勝つっきゃないってわけだ」「はあ」「次回『頭文字D』5連続ヘアピンで何かが起こる。Don't miss it!!!」

BGM

音楽

DANCE AROUND THE WORLD

DELTA QUEENS

拓海が駆るハチロクが登場するシーンに流れた楽曲。峠のテンションがアガっていく。

GET ME POWER

MEGA NRG MAN

拓海が覚醒し、ギアを入れた瞬間に流れる、痛快な楽曲。ハチロクの猛追がはじまる。

RUNNING IN THE 90'S

MAX COVER I

FD3Sにコーナーで追いつき、ドリフトを決めるハチロク。速いリズムが胸を駆りたてる。

CAST

拓　海　三木眞一郎
文　太　石塚運昇
イツキ　岩田光央
なつき　川澄綾子
祐　一　西村知道
池　谷　矢尾一樹
パ　パ　古澤　徹

涼　介　子安武人
啓　介　関　智一
健　二　高木　渉
細井　治
野島健児
鈴木　淳
田中伸幸

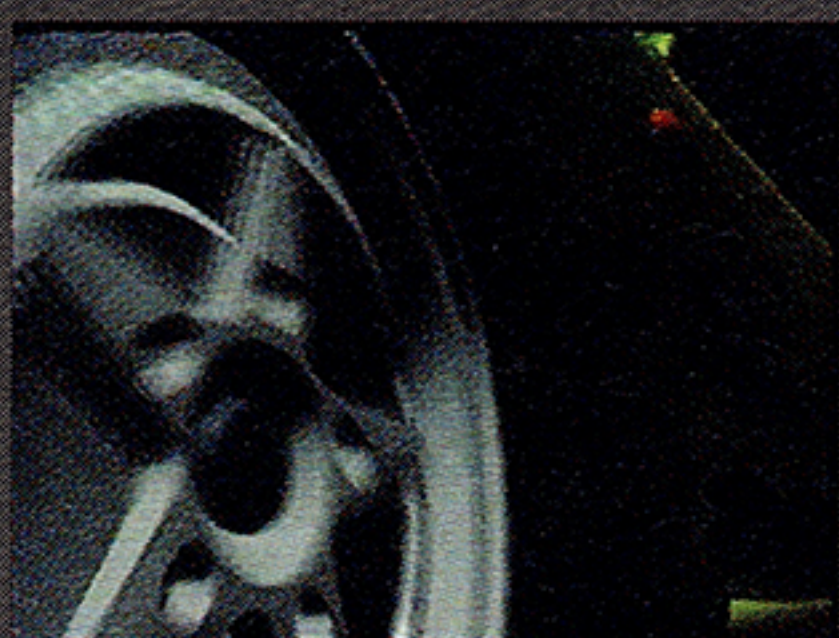
STAFF

プロデューサー　福田佳与(バステル)
茂垣弘道(スタジオコメット)
アシスタント・プロデューサー　菊地禎仁(スタジオコメット)
杉村重郎(スタジオぎゃろっぷ)
市川邦泰(プライム・ディレクション)
脚本　戸田博史
絵コンテ・演出　三沢　伸
監督補　成瀬輝男
調整　山田富二男
効果　小山健二
録音助手　田上祐二
音響制作担当　高寺　雄
録音スタジオ　アオイスタジオ
音響制作　テクノサウンド
作画監督　一川孝久
作画監督補　飯田清貴
レイアウト監修　林　千博
原画　大宅幸男／興村忠美／山崎　猛／飯田清貴
本田辰雄／西崎亜維／茂　洋二郎／新谷一博
増田雄一郎
動画　福地和浩／橋本　陽／ウォンバット(石山友久
岩田義昭／中野健史／大山伸吾
鈴木俊玄／小野木三斉)／白鷗動画
色彩設計・色指定　安斎直美
彩色　石黒文子／大倉喜美子／スタジオM(高橋洋子
鈴木香代子／岡本恵里)／ピーコック(金沢律子
合屋　翠／徳田栄子／大村規子)／白鷗動画
CG　ネスト(金田貞徳／田中和平／畑中詠美子／林　信明)
特効　中島正之
特効協力　谷藤薫児

背景　スタジオじゃっく(高尾克己／片岡一巳
秋葉　実)／K.PRODUCTION／E-CHO
撮影監督　森下成一
撮影　スタジオトゥインクル(鎌田克明
青木孝司／大田勝美／君島　崇
澤田浩司／福元達司／岩田雅幸
大野唯史／藤田智史／武原健二)
編集　岡安プロモーション(岡安　肇
小島俊彦／中葉由美子／村井秀明
川崎晃洋／三宅圭貴)
タイトル　マキ・プロ
現像　東京現像所

エンディングテーマ
「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)

挿入歌「NO ONE SLEEP IN TOKYO」
EDO BOYS
「SPACE BOY」DAVE RODGERS

音楽協力　avex group
制作管理　比留川　渉
デジタル管理　小林功治
制作進行　宮下雄洋
制作事務　田川美和
取材協力　ONIX新青梅アクセルオート
エンディング　トランスフォーマー
プロモーションビデオ　竹石　渉
広報　為永佐知男(フジテレビ)
制作協力　スタジオコメット

ACT.2

リベンジ宣言！ ほえるターボ

CAST

拓　海　三木眞一郎
文　太　石塚運昇
イツキ　岩田光央
なつき　川澄綾子
祐　一　西村知道
池　谷　矢尾一樹
啓　介　関　智一

健　二　高木　渉
細井　治
田中伸幸
かかずゆみ
宮城満希子

STAFF

プロデューサー　福田佳与(パステル)
茂垣弘道(スタジオコメット)
アシスタント・プロデューサー　菊地禎仁(スタジオコメット)
杉村重郎(スタジオぎゃろっぷ)
市川邦泰(プライム・ディレクション)
脚本　戸田博史
絵コンテ　三沢　伸
演出　工藤　進
監督補　成瀬輝男
調整　山田富二男
効果　小山健二
録音助手　田上祐二
音響制作担当　高寺　雄
録音スタジオ　アオイスタジオ
音響制作　テクノサウンド
作画監督　山崎　猛
作画監督補　飯田清貴
レイアウト監修　林　千博
原画　ウォンバット(大隈孝晴／吉田　潤／橋本宜夫
本住敏和／守田幸利／上口正樹)
動画　福地和浩／橋本　陽／ウォンバット(久保　正
井上健太郎／大崎裕則／渡辺浩史／菊池大輔
杉崎正和)／白鷗動画
色彩設計・色指定　安斎直美
彩色　石黒文子／大倉喜美子／スタジオM(高橋洋子
鈴木香代子／岡本恵里)／ピーコック(吉原千晴
阿部優子／鈴木陽子／佐藤裕子)／白鷗動画
CG　ネスト(後藤優一／島田真宗／矢羽田和徳
作野賢一郎)
特効　中島正之
特効協力　谷藤薫児

背景　スタジオじゃっく(高尾克己／片岡一巳
秋葉　実)／K.PRODUCTION／E-CHO
撮影監督　森下成一
撮影　スタジオトゥインクル(鎌田克明
青木孝司／大田勝美／君島　崇
澤田浩司／福元達司／岩田雅幸
大野唯史／藤田智史／武原健二)
編集　岡安プロモーション(岡安　肇
小島俊彦／中葉由美子／村井秀明
川崎晃洋／三宅圭貴)
タイトル　マキ・プロ
現像　東京現像所

エンディングテーマ
「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)

挿入歌
「BE MY BABE」JILLY
「REMEMBER ME」LESLIE PARRISH
「SPARK IN THE DARK」MAN POWER

音楽協力　avex group
制作管理　比留川　渉
デジタル管理　小林功治
制作進行　関山晃弘
制作事務　田川美和
取材協力　ONIX新青梅アクセルオート
映像協力　ホットバージョン
エンディング　トランスフォーマー
プロモーションビデオ　竹石　渉
広報　為永佐知男(フジテレビ)
制作協力　スタジオコメット

CAST

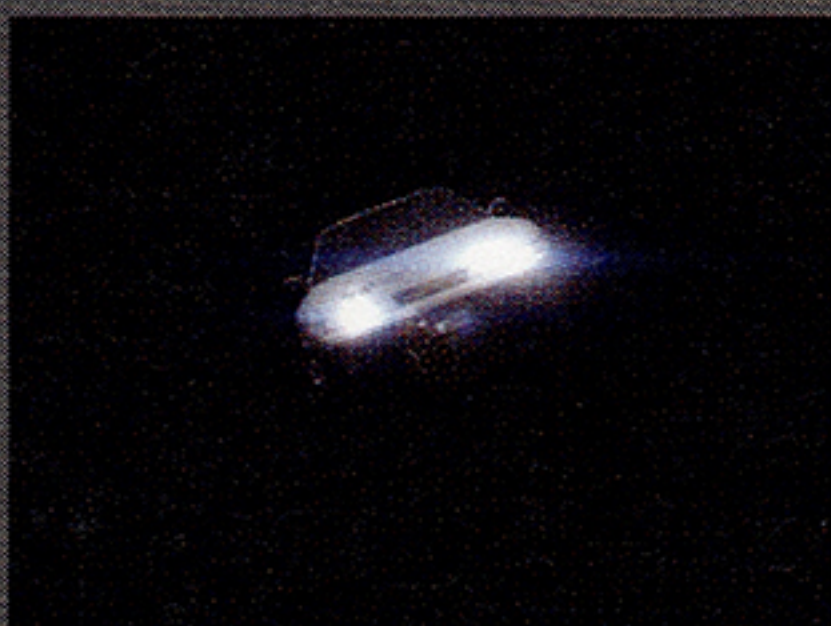
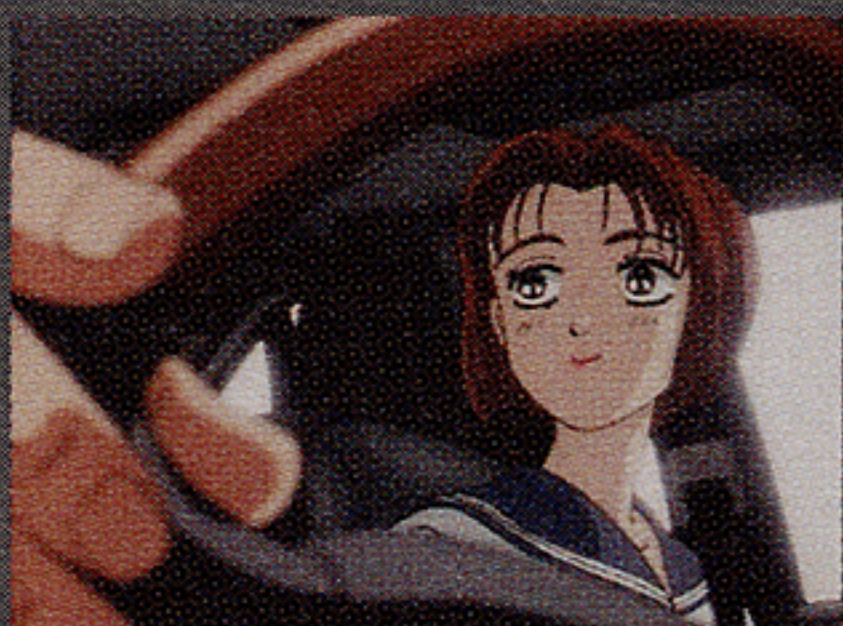
拓　海　三木眞一郎
文　太　石塚運昇
イツキ　岩田光央
なつき　川澄綾子
祐　一　西村知道
池　谷　矢尾一樹
健　二　高木　渉
パ　パ　古澤　徹
涼　介　子安武人
啓　介　関　智一
中　里　檜山修之
細井　治
鈴木　淳
田中伸幸
かかずゆみ
宮城満希子

STAFF

プロデューサー　福田佳与（パステル）
茂垣弘道（スタジオコメット）
アシスタント・プロデューサー　菊地禎仁（スタジオコメット）
杉村重郎（スタジオぎゃろっぷ）
市川邦泰（プライム・ディレクション）
脚本　戸田博史
絵コンテ・演出　葛谷直行
監督補　成瀬輝男
調整　山田富二男
効果　小山健二
録音助手　田上祐二
音響制作担当　高寺　雄
録音スタジオ　アオイスタジオ
音響制作　テクノサウンド
作画監督　一川孝久
作画監督補　飯田清貴
レイアウト監修　林　千博
原画　矢木正之／南　伸一郎
動画　福地和浩／橋本　陽／ウォンバット（永濱秀樹
北野志保理／上田帝佳／佐藤宏子／三浦　崇
菊池三好）／白鷗動画
色彩設計・色指定　安斎直美
彩色　石黒文子／大倉喜美子／スタジオM（高橋洋子
鈴木香代子／岡本恵里）／ピーコック（金沢律子
合屋　翠／徳田栄子／大村規子）／白鷗動画
CG　ネスト（田中和平／金田貞徳／草野純之／岩井美穂子）
特効　中島正之
特効協力　谷藤薫児
背景　スタジオじゃっく（高尾克己／片岡一巳／秋葉　実）
K.PRODUCTION／E-CHO
撮影監督　森下成一
撮影　スタジオトゥインクル（鎌田克明
青木孝司／大田勝美／君島　崇
澤田浩司／福元達司／岩田雅幸
大野唯史／藤田智史／武原健二）
編集　岡安プロモーション（岡安　肇
小島俊彦／中葉由美子／村井秀明
川崎晃洋／三宅圭貴）
タイトル　マキ・プロ
現像　東京現像所

エンディングテーマ
「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)

挿入歌
「DON'T STOP THE MUSIC」LOU GRANT

音楽協力　avex group
制作管理　比留川　渉
デジタル管理　小林功治
制作進行　塩原　正／青木茂雄
制作事務　田川美和
取材協力　ONIX新青梅アクセルオート
映像協力　ホットバージョン
エンディング　トランスフォーマー
プロモーションビデオ　竹石　渉
広報　為永佐知男（フジテレビ）
制作協力　スタジオコメット

交流戦突入！

CAST

拓　海　三木眞一郎
イツキ　岩田光央
池　谷　矢尾一樹
健　二　高木　渉
涼　介　子安武人
啓　介　関　智一
中　里　檜山修之

細井　治
坂本正吾
今村直樹
天田真人
鈴木　淳
田中伸幸

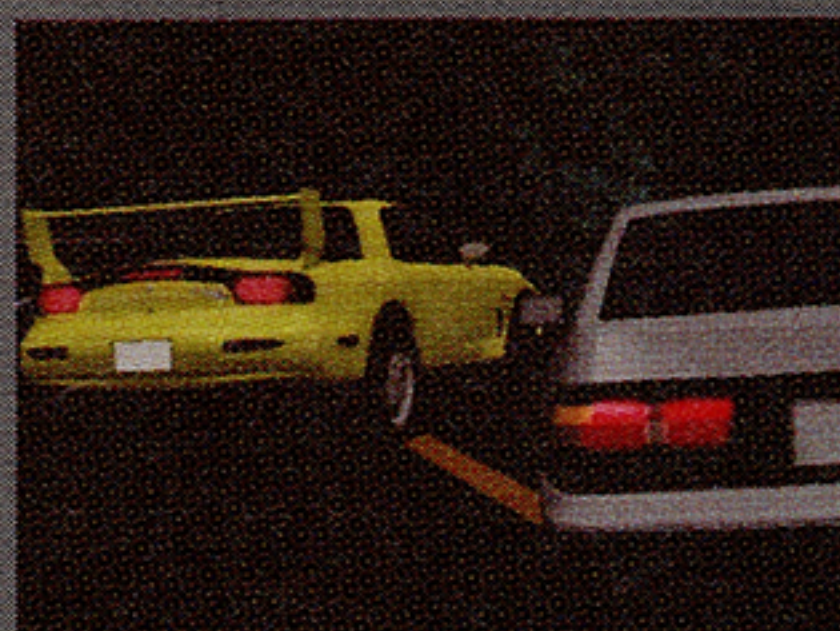
STAFF

プロデューサー　福田佳与(パステル)
茂垣弘道(スタジオコメット)
アシスタント・プロデューサー　菊地禎仁(スタジオコメット)
杉村重郎(スタジオぎゃろっぷ)
市川邦泰(プライム・ディレクション)
脚本　戸田博史
絵コンテ　三沢　伸
演出　小滝　礼
監督補　成瀬輝男
調整　山田富二男
効果　小山健二
録音助手　田上祐二
音響制作担当　高寺　雄
録音スタジオ　アオイスタジオ
音響制作　テクノサウンド
作画監督　辻　初樹
作画監督補　飯田清貴
レイアウト監修　林　千博
原画　小林一幸／広江克己／吉岡　勝／辻　初樹
動画　礒田智美／青木美穂／山崎千絵／外崎美帆
同友動画
色彩設計　安斎直美
色指定　藤田弘美
彩色　同友動画
CG　ネスト(島田真宗／後藤優一／矢羽田和徳
小和田智子)
特効　完甘幸隆
特効協力　谷藤薫児
背景　スタジオじゃっく(高尾克己／片岡一巳／秋葉　実)
K.PRODUCTION／E-CHO

撮影監督　赤沢賢二
撮影　清水泰宏／荒川智志／筒井義明
中冨広志／加藤　顕／遠藤匠彦
岩井康博／笠原正博／鈴木意久夫
木次智巳
編集　岡安プロモーション(岡安　肇
小島俊彦／中葉由美子／村井秀明
川崎晃洋／三宅圭貴)
タイトル　マキ・プロ
現像　東京現像所

エンディングテーマ
「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)

挿入歌
「RUNNING IN THE '90S」MAX COVER I
「DANCE AROUND THE WORLD」
DELTA QUEENS
「GET ME POWER」MEGA NRG MAN

音楽協力　avex group
制作管理　比留川　渉
デジタル管理　小林功治
制作担当　河村義治
制作進行　西城　真
取材協力　ONIX新青梅アクセルオート
映像協力　ホットバージョン
エンディング　トランスフォーマー
プロモーションビデオ　竹石　渉
広報　為永佐知男(フジテレビ)
制作協力　スタジオコメット
アニメーション制作　スタジオぎゃろっぷ

人気シリーズを貫いていた、ひとつのコンセプトとは？
アニメ『頭文字D』の生みの親、宇佐美廉エグゼクティブプロデューサーが語る14年目の真実

アニメ『頭文字D』の夜明け

宇佐美廉エグゼクティブプロデューサー
インタビュー

本物の音を追求することからはじまった

――アニメ『頭文字D』に宇佐美さんが関わったきっかけから教えて下さい。

当時は『頭文字D』が連載されている雑誌『ヤングマガジン』がすごく売れていました。その連載漫画のラジオドラマをつくっていたんです。あのころは、アニメの人気が一時停滞していた時期だったんじゃないのかな。ラジオの放送料が安かったこともあって、番組の中の15分くらいでラジオドラマをやってみようと。他の作品で実際につくってみたら、それがおもしろくてね。『頭文字D』もラジオドラマをつくってみようということになったんです。自動車マニアはサウンドにうるさいから、音に凝ろうということになった。『ホットバージョン』（※1）の編集部に協力していただいて、本編に登場するマシンと同じチューンナップをしたマシンを手配してもらったんですよ。それでスタッフといっしょにサーキットに行って、クルマを走らせてエンジン音やスキール音を録音したんです。それはアニメになってからも、必ずやるようにしています。アニメのファーストステージからは土屋圭市さん（※2）に運転してもらって、本物の音を録音して、本編で使ってます。

――音からアニメ『頭文字D』は始まったんですね。

そのラジオドラマがヒットして、じゃあ次にアニメをやってみようということになったんです。大きなきっかけは3DCGをスタジオレベルでつくれるようになったこと。クルマを手描きで作画するのは難しいんです。ゆがむし、カッコ悪くなる。しかも、カメラを動かさないとスピード感がでない。だけど、カメラを動かすようなアニメを作画でつくるのは大変だし。『頭文字D』のアニメ化には3DCGが必要でした。

宇佐美 廉

映像制作プロデュース会社・株式会社オービー企画代表取締役。フリーエディターを経て、株式会社オービー企画を1981年9月に設立。『頭文字D』『みゆき』『タッチ』『新・北斗の拳』『人間交差点』『エリア88』『DEAR BOYS』『湾岸MIDNIGHT』などのアニメ化を手がける。

アニメ『頭文字D』の放送局に提案した企画書。原作『頭文字D』の影響力や、アニメ化した際のシリーズ構成などが書かれている。

※1
『ホットバージョン』
1991年2&4モータリング社（講談社グループ）より創刊されたDVDマガジン。2011年に休刊することが発表されたが、HVプロジェクトにより復刊。土屋圭市が登場する「峠最強伝説」のコーナーが人気だった。土屋圭市が愛用するチューンドAE86を、ドリキン☆号と呼び人気を集める。

※2
土屋圭市
カリスマ的な人気を誇るレーシングドライバー。峠道で腕を磨き、1977年に富士フレッシュマンレースでデビュー。以来、F3、全日本ツーリングカー選手権（JTCC）、ル・マン24時間レースで活躍する。ドリフト走行を多用するそのドライビングスタイルから「ドリキン」（ドリフトキング）と呼ばれた。アニメ『頭文字D』では監修を務めるほか、声優として出演する。

アニメ『頭文字D』のテーマは「エヴォリューション」

——当時、３DCGと手描きのアニメが融合している作品は珍しかったんじゃないでしょうか。

といっても、当時のコンピュータのスペックは高くないから３DCGをレンダリング（描画）する速度がすごく遅いんです。当時は……Windowsを使っていたんですけど、クルマの３DCGを描画しはじめると数時間かかる。「じゃあ、この角度でクルマを走らせよう」と決めると、コンピュータに計算させて、僕らは食事を取りに行くんです。その後、数時間後にスタジオに戻ってきて、描画が終わった３DCGをチェックして。それがちょっと間違っていると、もういちど数時間かけてやりなおし……。とにかく手間がかかりましたね。とくにファーストステージは３DCG映像の表現力も限られていたので、バトルシーンのクルマのスピード感もなかなか出せなかった。だけど、その拙い３DCGのクオリティを逆手に取ろうと考えて。ファーストステージのコンセプトは「エヴォリューション（進化）」としたんです。主人公の藤原拓海も進化するけど、アニメ制作陣も進化していこうと。２クール、全26話の放送の中で３DCGがどんどん進化しています。第1話では氷の上を滑っているようですけど、最終話では全然違う。実は1話ごとにどんな新しいCGの表現を見せていくか、事前にスケジュールを計画していたんです。

——具体的にどんな進化をさせていったんですか。

単純にいうと「ドライバーが乗り込むときにクルマが沈みこむ」とか、「ブレーキを踏んだときにタイヤのブレーキドラムを赤く発光させる」とか、暗闇の中をクルマが走るときに「ライトの残像が軌跡になる」とか。あるいはテクスチャをどんどん変えていって、路面の雰囲気を変えたり……。

アニメ『頭文字Ｄ』の最初のポスター。
３DCGで描かれたハチロクが輝く。

1話ごとにどんな表現を見せていくのか、というスケジュールを立てていたんです。制作上の限界からファーストステージのバトルシーンは1話あたり約2分と決めていたんだけど、3DCG技術の向上とともにバトルシーンが長くなっていった。さらにファーストステージからセカンドステージと、シーズンを重ねるごとに、技術的な進化をさせていきました。フォースステージではなんと20分近く走り続けている（笑）。どんどん表現力を増していくことで、こちらがやれることも広がっていく。10年以上にわたってアニメ『頭文字D』に関わっていてすごく刺激的でしたよ。

逆境を跳ね返して、大ヒットシリーズに

——音楽面も大ヒットしました。

BGMをダンスミュージックにしようというのは最初から考えていたんです。当時勢いのあったエイベックスさんにお願いしたら、BGMに採用した「SUPER EUROBEAT」（※3）のアルバムがたちまち50万枚を突破するヒットになったんですよ。オープニングの主題歌を歌ってもらったm.o.v.eもヒットしたね。『頭文字D』のオープニングの映像はPVみたいにつくりたかったんです。クルマの3DCGとキャラクターのアニメーションの素材をバラバラに発注して、映像編集の小深田真次さん（※4）と僕でスタジオにこもり、m.o.v.eの主題歌にあわせて素材を組み合わせていきました。ほかのアニメにはない映像になったと思っています。僕と小深田さんが曲にあわせて素材を組み合わせていくというやり方は、ファーストステージに限らず、シリーズの伝統になっています。

——作品の反響は大きかったですよね。

関東では土曜日夜中の3時20分に放送していたんだけど、視聴率で3%を超えちゃうんだもの。占拠率で45%を超えていたときもあった。視聴率はすぐに発表されるから、すぐに人気が出ていることがわかりました。あのころのジョークだけど、あまりにも数字が高いんで「走り屋たちが夜にひと走りしたあとに、家で『頭文字D』を観ているんじゃないか」なんて言っていました（笑）。

※3
「SUPER EUROBEAT」
エイベックスがリリースした、ダンスミュージックのコンピレーションアルバムシリーズ。主にイタリアやイギリスで生まれた「ユーロビート」と呼ばれる、速いテンポの楽曲が扱われた。アニメ『頭文字D』のバトルシーンのBGMとして扱われたことで、モータースポーツシーンでファン層を拡大。SUPER GTのオフィシャルBGMに起用されたこともある。

※4
小深田真次
映像編集者。有限会社エディットバフィン代表。アーティストのライブビデオや、モーターショウなどの展示映像編集。アニメ『頭文字D』では映像編集を担当している。

――なぜ放送時間は深夜になったのでしょうか。

当時、ポケモンショック（※5）が起きたんです。それはとても大きな事件で、放送局がアニメの現場に対して、厳しいことを言いはじめたんですよ。僕らに対しても同じで、『頭文字D』を放送することになっていた放送局のスタッフと意見が食い違ってしまったんです（笑）。それで放送開始予定日の2ヵ月前に、その放送局で放送するのをやめることになってしまって……。その後、放送局を変えて、結局フジテレビの深夜枠で放送することになった。いろいろと大変だったんですよ。だから実は最初のアニメ化の発表では、別の放送局で放送することになっているんです（笑）。

――そんなことがあったんですね。仕方がない事情とはいえ、逆境の中での放送開始です。

でも、第1話の放送が終わって反響の大きさはわかりました。しかも、レンタルのDVDが1万本ぐらい出て、セルVHSは2万本以上を達成しました。

頭文字〈イニシャル〉Ｄ　視聴率表
1998年4月18日〜12月5日放送

日付	話数	視聴率(%)	占拠率(%)
４／１８	第１話	２.７	２４.５
４／２５	第２話	１.７	２４.５
５／　２	第３話	１.５	１６.７
５／　９	第４話	１.９	２８.８
５／１６	第５話	２.８	３５.７
５／２３	第６話	２.２	２８.３
６／１３	第７話	２.８	２４.８
６／２０	第８話	３.２	３０.５
６／２７	第９話	２.１	３０.５
７／　４	第１０話	３.２	３３.１
７／１１	第１１話	２.０	１８.５
８／　１	第１２話	１.８	２４.３
８／　８	第１３話	２.５	２５.４
８／１５	第１４話	３.４	４６.６
８／２２	第１５話	１.７	１３.８
８／２９	第１６話	２.４	２９.４
９／１２	第１７話	２.３	３２.６
９／１９	第１８話	３.８	３５.５
９／２６	第１９話	２.４	３７.３
１０／　１	第２０話	４.５	２３.８
１０／１７	第２１話	２.１	２２.６
１０／２４	第２２話	３.６	３６.０
１１／　７	第２３話	２.９	２９.８
１１／１４	第２４話	３.２	３３.１
１１／２８	第２５話	３.８	４１.９
１２／　５	第２６話	３.０	４３.６

深夜27時20分放送という、深夜というよりは早朝に近い時間に『頭文字Ｄ』は放送された。最高視聴率4.5%、平均視聴率約2.5%という高視聴率を記録した。

※5 **ポケモンショック**
1997年12月16日にテレビ東京および系列局で放送された『ポケットモンスター』で起きた事件。作中のストロボ映像が、視聴者に刺激を与え、光過敏性発作などを起こした。この事件をきっかけに、各テレビ局は再発防止策を実施。光の点滅表現などにガイドラインを設け、作品の放送中に「テレビを見るときは部屋を明るくして離れて見てください」などの警告文を入れることが必須となった。

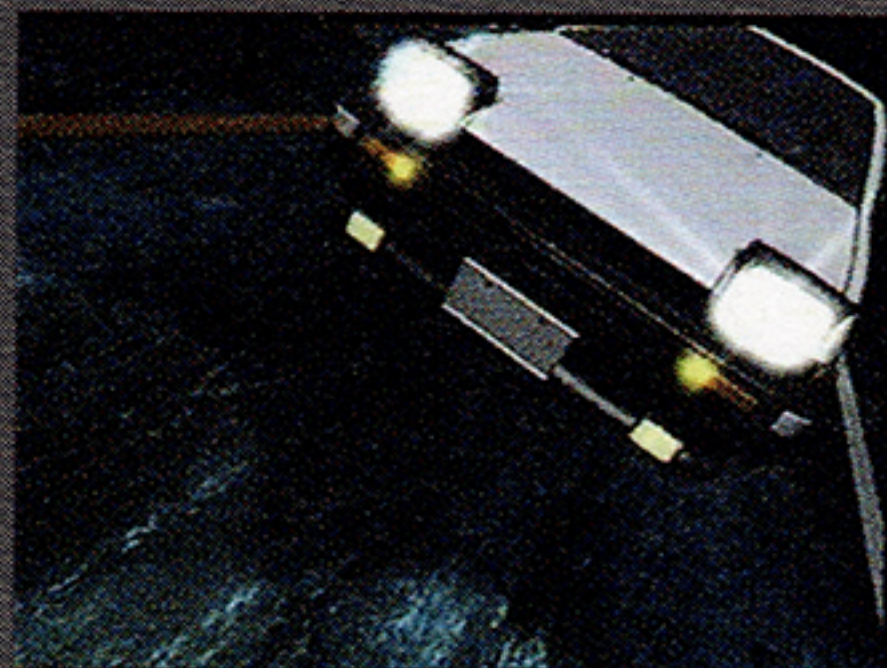
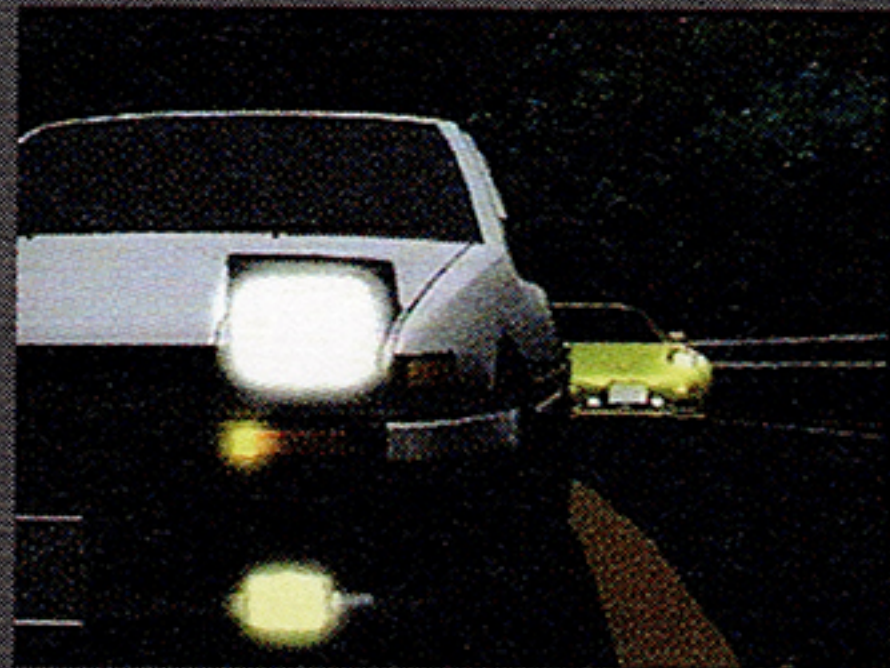
――アニメ『頭文字D』は長い間にわたり、ファンから愛される作品になりました。あらためて『頭文字D』の魅力とはなんだと思いますか。

少年漫画の王道ですよね。力の弱いものが逆転して勝つんだから、これほど胸がすくものはないよ。初期の連載だと「溝落とし走行」とか、「側溝またぎのショートカット」や「ドリンクホルダーに紙コップを置く」みたいなテクニックも登場するしね。しかも、恋愛があるしね。仮にクルマに興味を持っていなかったとしても、一気に読める「漫画としてのおもしろさ」がある。この青春ドラマを出そうと思って、脚本を徹底的に作り込みました。うちのポリシーは、とにかく原作に忠実につくるということ。ドラマの根幹の部分は絶対に変えない。それが原作ものをつくるときに大切にしていることです。僕らの制作スタイルはほかのアニメ制作会社とはちょっとだけ違って、プロデュース側が脚本でがっちり作り込んでいくんです。脚本家の戸田(博史)さんや岸間(信明)さん(※6)とじっくりと打ち合わせして、何度も何度も脚本を直して、原作のおもしろさを詰め込むんです。その脚本ができあがったら、その脚本を変えないようにスタッフに絵コンテを切ってもらう。だからこそ、スタッフが変わったとしても現場がブレないし、原作の良さが保たれる。シリーズが長続きする秘訣かもしれません。でも当時と同じことをやっても、現在はヒットしないでしょう。3DCG技術の進化、原作の魅力……すべてがあの時期だから起きたことだと思います。

青春の王道だからこそ、丁寧に作り込む

――ファーストステージから10年以上が過ぎましたが、『頭文字D』に関わられた感想をお聞かせください。

ファーストステージのころから『頭文字D』は、いろいろなやりたいことを現場に持ち込んで、高いモチベーションでつくることのできた作品でした。僕もいろいろなアニメ作品を手がけてきたけれど、『頭文字D』ほど多彩な要素を入れ込んだ作品はない。これほど長く関わった作品もなかったですからね。大変なこともたくさんあったけれど、毎回新しいことに挑戦できる作品だと思います。

※6
戸田博史、岸間信明
ともにアニメ『頭文字D』シリーズを手がけてきた脚本家。戸田博史は70年代からTVドラマやアニメで活躍。『北斗の拳』シリーズや『スケバン刑事』シリーズで筆をふるった。岸間信明は80年代から多数のアニメ作品で活躍、シリーズ構成作品に『SLAM DUNK』『毎日かあさん』などがある。

に焼き付けろ!

武内樹:岩田光央　健二:高木渉　小柏健:有本欽隆　藤原文太:石塚運昇
キャラクターデザイン:佐藤正樹　総作画監督:小丸敏之　メカデザイン・メカ作監:横井秀章
音響監督:三間雅文　監修:土屋圭市　アニメーション制作:Synergy SP　プロデューサー:福田佳与

ついにFifth Stageがはじまった!
プロジェクトDのエースとして名を轟かす
拓海の前に、次々と強敵があらわれる。
だが、今度の相手はひと味ちがう。
え? 拓海がもうひとり? 相手が強いほど、
拓海とハチロクの走りが冴え渡る!!

First Stageから14年。アニメ『頭文字D』が装いを新たに走りだした。
藤原拓海は高校を卒業し、高橋涼介が組織する「プロジェクトD」への参加を決めた。栃木、埼玉、茨城と県外遠征に行き、次々と勝利をおさめてきた。今では、ヒルクライムの高橋啓介と並び、ダウンヒルのスペシャリストとして、

最新シリーズFifth Stage始動!

熱いバトルを目

頭文字(イニシャル)D　Fifth Stage　11月9日(金曜日)　アニマックスpresents PPVにて放送

Cast　藤原拓海:三木眞一郎　高橋涼介:子安武人　高橋啓介:関智一　史浩:細井治　池谷浩一郎:矢尾一樹

Staff　原作:しげの秀一(講談社「ヤングマガジン」連載)　企画:庄司隆三　脚本:岸間信明　音楽:梅堀淳
CG監督:安田兼盛　美術監督:坂本信人　撮影監督:池上伸治　編集:小深田真次
監督:橋本みつお　製作:ウェッジリンク

走り屋の世界では知らぬ者はいない存在だ。

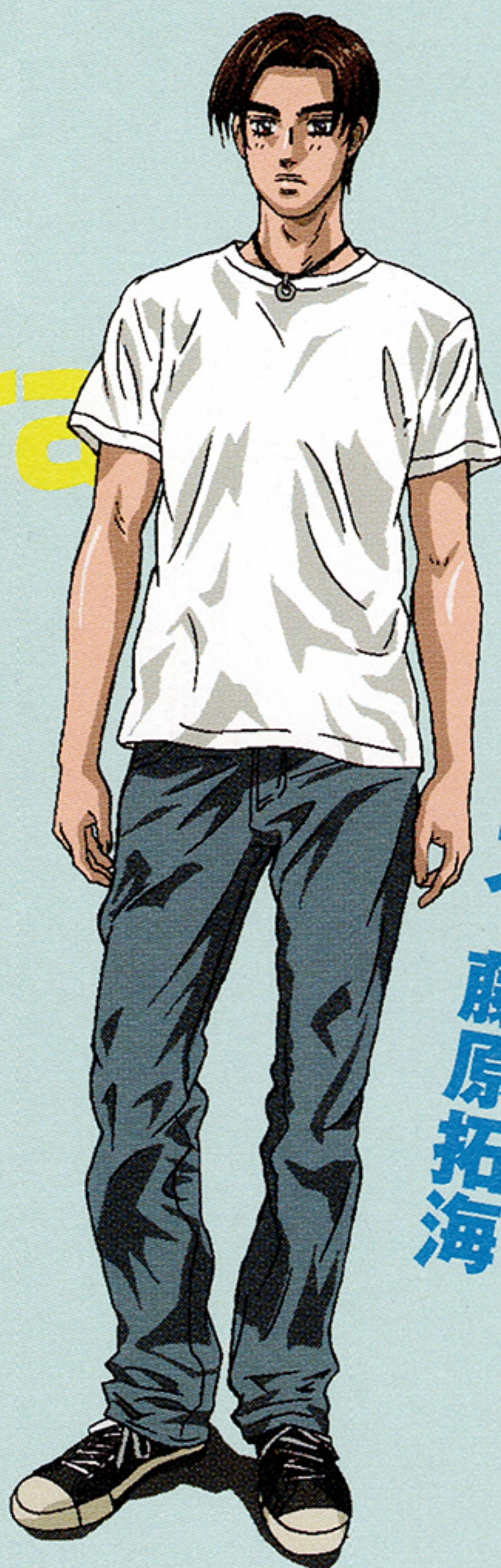
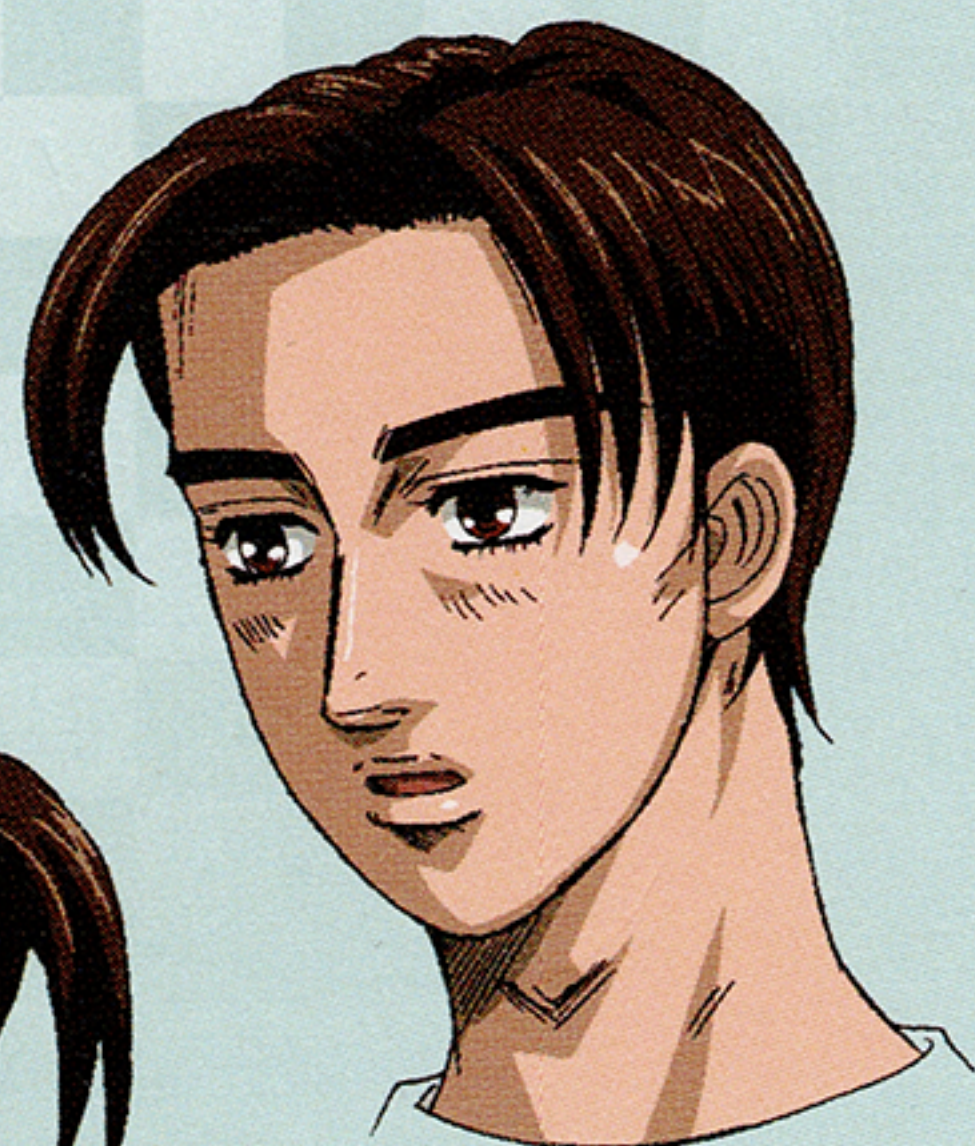
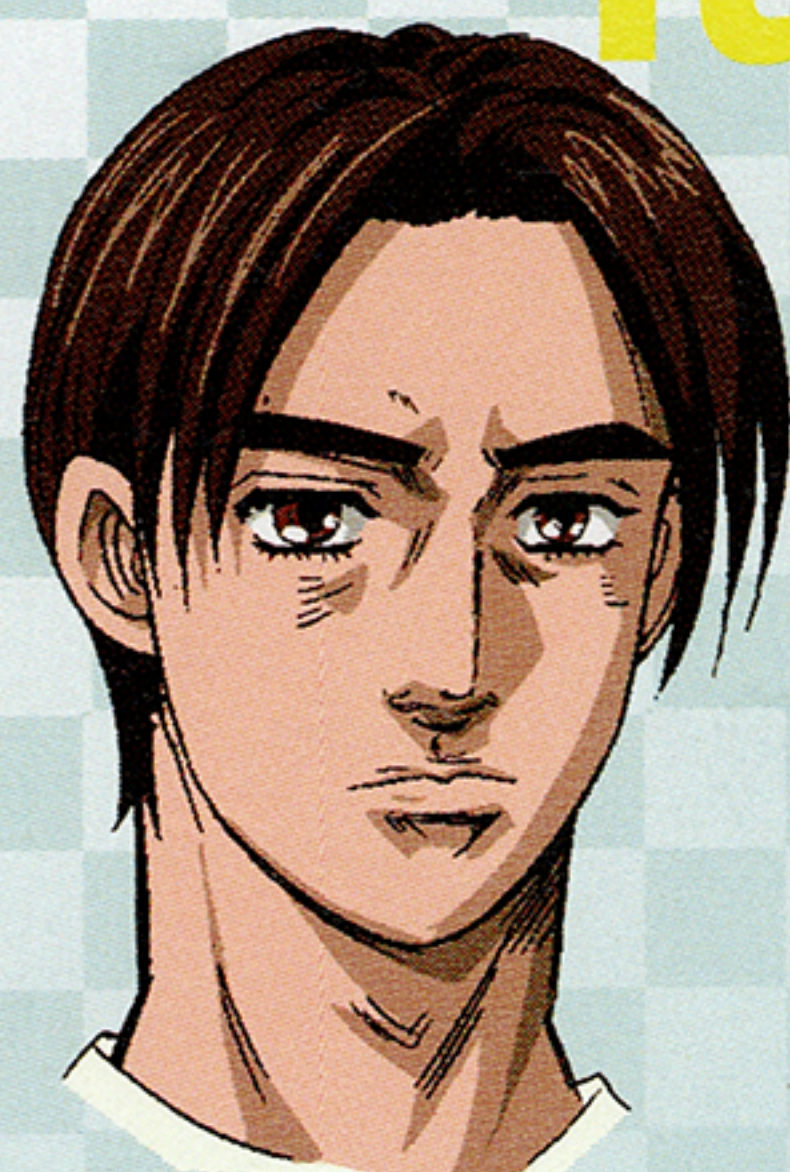
そんなある日、拓海は不可思議なウワサを耳にする。覚えのない埼玉の峠で「プロジェクトDのダブルエースに会った」という者がいたのだ。拓海は樹とともにレビンでウワサの峠に向かう。そこには、パンダトレノのハチロクと黄色のFD、そして、ふたりの男がいた!?

監督は橋本みつお、キャラクターデザイン・総作画監督に、『頭文字D Second Stage』でも活躍した佐藤正樹を起用。OP曲はもちろんm.o.v.eが務める。

◀次ページで新デザインの拓海たちを紹介!

Fifth Stage キャラクターデザイン!

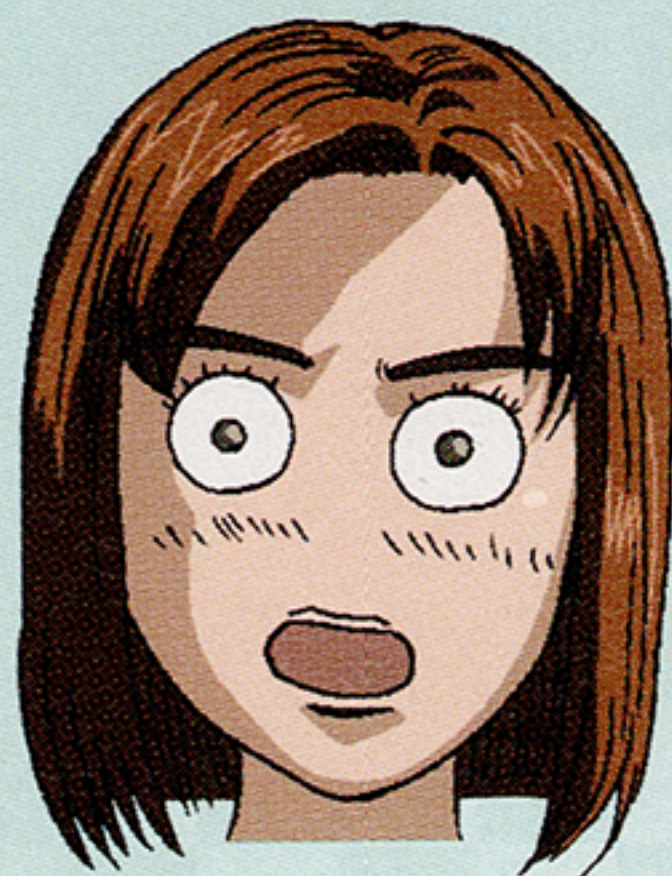
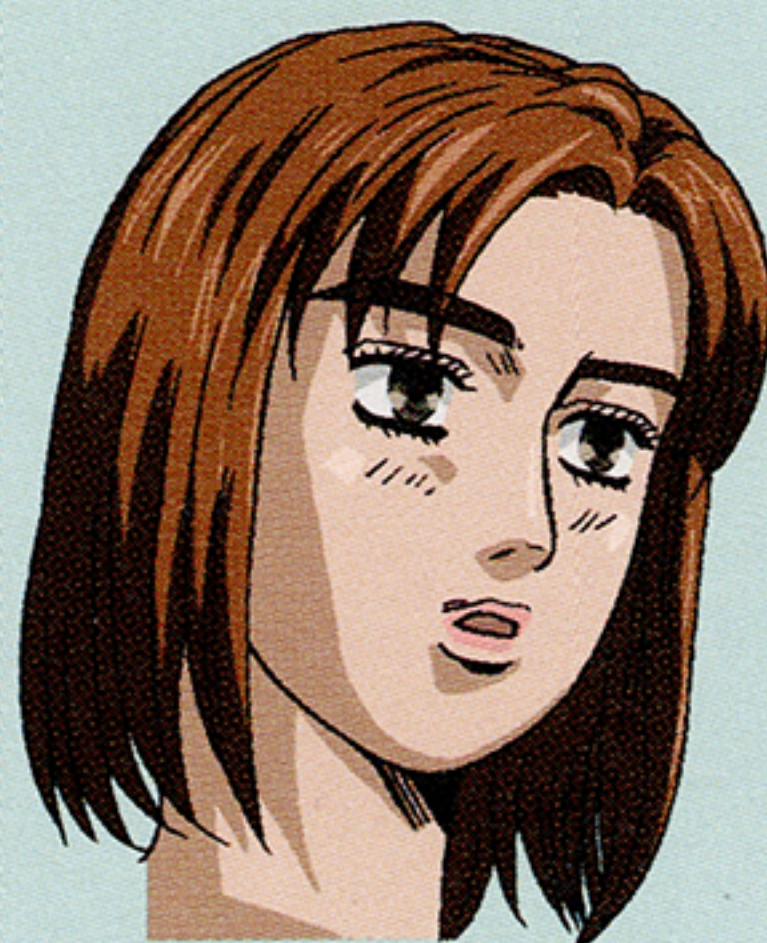
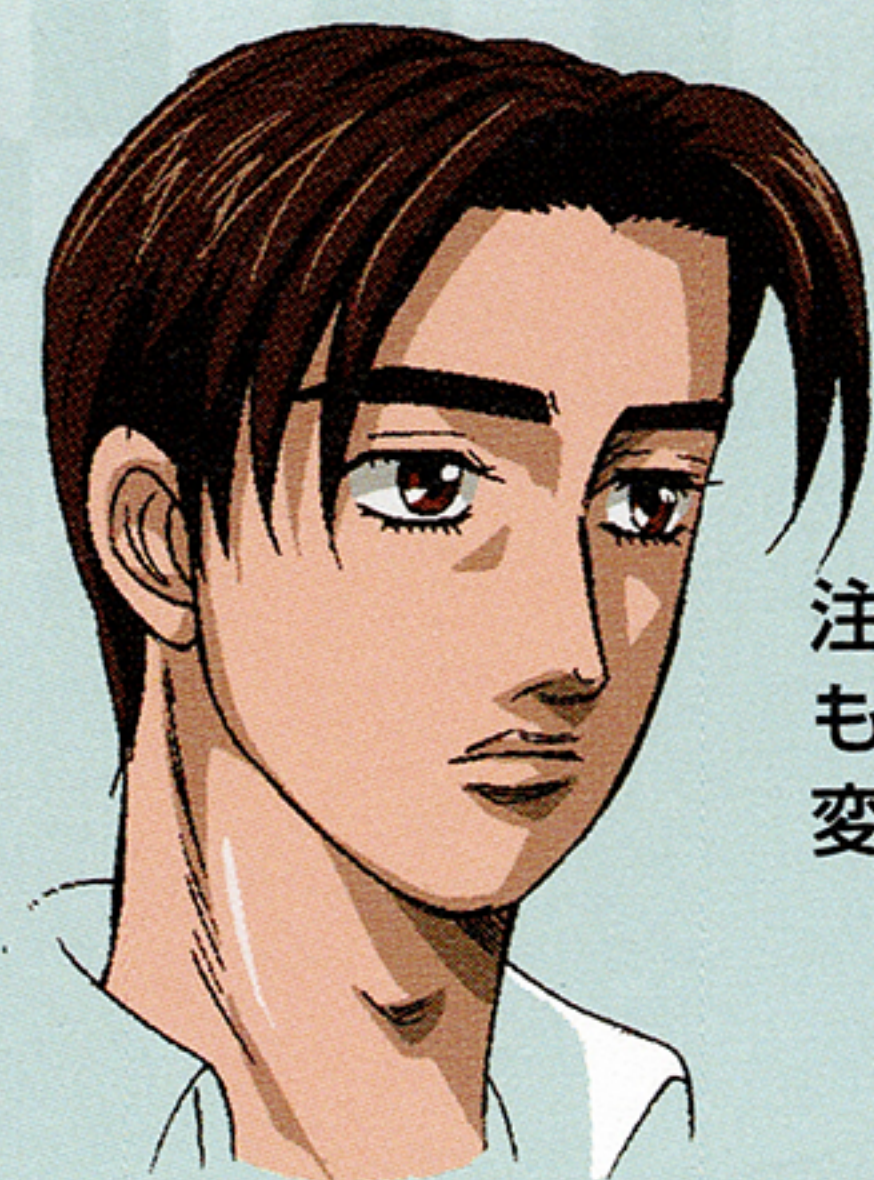
Takumi Fujiwara
藤原拓海

高校を卒業し、働きながらプロジェクトDに参加。ダウンヒルのスペシャリストとして、その腕前はますます冴え渡る。

プロジェクトDのエース・藤原拓海

注目の走り屋となった今でも、ぼぉ〜っとした表情は変わらない!?

偽者登場!?

「プロジェクトD」のTシャツを着たこの男たちは一体!????

Mika Uehara
上原美佳

気の強い女子高生

拓海の前でも物怖じしない性格で拓海を翻弄!? 高校のゴルフ部に所属する。

メモリアル DVD(ディーブイディー)マガジン
頭文字D(イニシャルディ) First Stage(ファーストステージ) Dash編(ダッシュへん) VOL.1

2012年11月2日　第1刷発行

講談社編

発行者：清水保雅
発行所：株式会社　講談社
〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21
［電話］編集部：03-5395-3570
販売部：03-5395-3608
業務部：03-5395-3603
印刷所：大日本印刷株式会社
製本所：大日本印刷株式会社

N.D.C.726　36p　19cm　Printed in Japan　ISBN 978-4-06-358422-6

MAGAZINE STAFF

編集	西　保雄（講談社）
	柿崎俊道
執筆	志田英邦
	柿崎俊道
デザイン	大森寛士（masterpiece inc.）
取材協力	福田佳与

DVD STAFF

ディレクション	似鳥将俊（Video-Tech）／渡辺有希（Video-Tech）
	柿崎俊道
DVDコーディネート	似鳥将俊（Video-Tech）／渡辺有希（Video-Tech）
DVDエンコード	林　慎一（Video-Tech）
DVDオーサリング	堀岡祐子（Video-Tech）
編集	尾形茂信（Video-Tech）／渡邉吉郎（Video-Tech）
メニューデザイン	渡邉吉郎（Video-Tech）／大森寛士（masterpiece inc.）
MA	高木公平
撮影	木塚　慶（REC）
VE・音声	星　照光（REC）
取材協力	福田佳与

CONTENTS
豪華インタビュー m.o.v.e 14年目のHORIZON
頭文字D ストーリー解説(ACT.1〜ACT.4)
アニメ頭文字Dが生まれた1998年
プロデューサー宇佐美廉が語るアニメ『頭文字D』の夜明け
最新情報!『頭文字D Fifth Stage』の全貌!!
藤原とうふ店